LIBRARY DEFENSE
Force in the hardship
図書館戦争
LIBRARY WARS

本を守る。想いを守る。

INTRODUCTION
イントロダクション

「フリーター、家を買う。」「阪急電車」「県庁おもてなし課」「空飛ぶ広報室」など数々のベストセラーを生み出している当代きっての人気作家・有川浩（ありかわ ひろ）。有川自身が自分の代表作として認めている「図書館戦争」が遂に実写映画化を果たしました。「図書館戦争」は2006年に刊行され、現在までに続編と別冊も含めて6冊が発表され、シリーズ累計発行部数が350万部を超えている超人気作品。既にコミック化、テレビアニメ化、劇場アニメ化がなされていて、今回が満を持しての初実写化となります。

舞台は昭和から平成ではなく「正化（せいか）」という時代に移った日本。そこは国家によるメディアの検閲が正当化されている時代で、こういう日本に成り得たかもしれないというある種のパラレルワールドの設定です。そんな時代に「知る権利」や「本を読む自由」を守るために図書館側から生まれた自衛組織「図書隊」。国家権力で銃器を手にした「メディア良化隊」と日夜激しい攻防戦を繰り広げながら、時に笑い、時に泣き、時には恋にも落ちる。「図書館戦争」シリーズは、隊員たちのそんな奮闘ぶりが描かれます。シリーズ1作目となる「図書館戦争」では、図書隊に入隊してきた新米の熱血女性隊員とそれを鍛える鬼教官の物語が展開されます。

「図書館戦争」シリーズはそのファンの数が多いだけでなく、その熱度が高いことでも有名で、2011年には本の雑誌「ダ・ヴィンチ」で異例の読者投票による仮想の誌上キャスティング（もし実写化されたらこの役は誰にやってほしい?）が実施されました。そして、堂上篤役・笠原郁役でそれぞれ1位を獲ったのが、今回の映画のキャスティングでもある岡田准一と榮倉奈々でした。岡田と榮倉はこれが初共演。岡田は『SP』『永遠の0（ゼロ）』などにも出演していて、武術や格闘技のインストラクター資格も持っている、アクションが体に沁み込んでいる俳優。対する榮倉は長身でまっすぐな印象が強く、健康的で純情なイメージのある女優。原作イメージにもぴったりで、かつそれぞれ第一線で活躍中の二人が本作で生んだツンデレ化学反応は、初々しく爽やかな青春物語としての見どころでもあります。

また、二人を囲むキャスティングも原作イメージに忠実で、かつ豪華なキャスティングが実現しました。まず、笠原郁の同期であり頭の切れる美人情報屋・柴崎麻子には栗山千明。同じく同期のクールな超エリート・手塚光には福士蒼汰。堂上の同僚であり笑顔で正論を繰り出す小牧幹久には田中圭。堂上や郁の所属するエリート部隊・図書特殊部隊（ライブラリータスクフォース）の豪腕隊長・玄田竜助には橋本じゅん。その玄田の同窓生であり週刊「新世相」の敏腕女性記者・折口マキには西田尚美。そして、映画オリジナルキャストとして図書隊のトップである、柔和だがブレのない基地司令・仁科巌には石坂浩二。ファンも納得のこれぞ理想のキャスティングが実現しています。

監督は『GANTZ』シリーズで日本映画の新たな地平を切り開いた佐藤信介。ある意味荒唐無稽とも言える世界観をスタイリッシュに描き出し、シリーズを大ヒットに導きました。そんな佐藤監督が次に選んだ映画がこの『図書館戦争』でした。『図書館戦争』はSFあり、アクションあり、ラブあり、コメディありの佐藤監督曰く「誰も観たことがない」映画。でも、だからこそチャレンジしてまた新しい映画を見せたいと今回の映画化に乗り出しました。アクションはハードに見せつつ、ツンデレラブコメ要素は優しく温かく紡ぎ出し、検閲と自由といった時代性溢れるテーマも内包し、最後は大感動！といった、これぞまさしく王道エンターテインメントな映画が誕生しました。

本を読む自由。人を好きになる自由。そして、好きな人を守る自由。現代ではまだ当たり前のものとして享受できる自由を守るために戦う図書隊員の男子女子。これはそんな隊員たちの愛と自由の物語です。女の子のドキドキと男子のワクワクが詰まった、手に汗握って笑って泣いてキュンとする、本と恋のツンデレ・エンターテインメント、是非お楽しみください。

STORY
ストーリー

正化(せいか)31年、あらゆるメディアを取り締まる法律「メディア良化法」が施行され30年が過ぎた日本。

公序良俗を乱す表現を取り締まるために、武力も厭わぬ検閲が正当化されていた――。

そんな時代でも読書の自由を守るため、その検閲に対抗すべく生まれた図書館の自衛組織「図書隊」に笠原郁(かさはらいく)(榮倉奈々)が入隊する。

高校時代に読みたい本と自分を助けてくれた図書隊員を“王子様”と憧れての入隊だった。

ところが、担当教官の二等図書正・堂上篤(どうじょうあつし)(岡田准一)は事あるごとに厳しく指導をする鬼教官で、郁の憧れの王子様図書隊員のことも「あさはかで愚かな隊員だ」とバッサリ。

激しく反発する郁だが、堂上は厳しく突き放しながらも絶妙のタイミングでフォローを入れつつ郁を育てる。

そのツンデレ訓練のおかげか、郁は女性初の図書特殊部隊(ライブラリータスクフォース)に配属される。

堂上や小牧幹久(こまきみきひさ)(田中圭)の下で、同期の超エリート・

手塚光（福士蒼汰）にコケにされたり、業務部の美人同期・柴崎麻子（栗山千明）に励まされたりしながら、ハードな訓練と図書館業務をこなす。

そんな日々の中で、なぜだか郁は優しかった王子様とは正反対の堂上のことが段々と気になる存在になっていく……。

実はその裏で堂上には、郁には絶対に言えない秘密があったのだった。

ある日、「メディア良化法」に関わるあらゆる報道資料が残っている小田原の情報歴史図書館が閉館されることになり、その全資料が関東図書隊に移管されることとなる。

その報道資料は、法成立に関わる真実さえをも明るみにするものだと言われており、その事実をもみ消したいメディア良化委員会が喉から手が出るほど欲しがるもの。

その資料受け渡しの日が図書隊と良化隊との全面戦争の日となるのは避けられないものとなってくる。

ところが、危険な前線に立つべきタスクフォースの一員であるにもかかわらず、郁は突然戦闘配備から外され、図書基地司令・仁科巌（石坂浩二）の護衛を命じられる。

ショックを隠せない郁に、堂上は何の言葉もかけようとしない。

本を守るための過去最大の戦闘が始まるそのとき、堂上の耳にもう一つの思わぬ事件が知らされる……。

はたして堂上を襲った思わぬ事件とは？ 堂上は本を、自由を、そして郁を守れるのか？

愛と自由を守るための戦いが今始まる――。

CHARACTERS
キャラクター相関図

同期（友情）

堂上 篤（どうじょう あつし）【岡田准一】
（関東図書基地・図書特殊部隊 二等図書正）

図書隊のエリート部隊・図書特殊部隊に所属している優秀な図書隊員。実は内面は熱く激しい心の持ち主なのだが、普段は冷徹とも言えるくらいの切れ味で仕事を捌き、新人を厳しく鍛える鬼教官。なぜか郁には特に厳しくあたる。

小牧幹久（こまき みきひさ）【田中 圭】
（関東図書基地・図書特殊部隊 二等図書正）

正論を吐かせたら右に出る者はいないほどの図書特殊部隊の理論派隊員。堂上班の副班長であり、バディでもある。優しい微笑みで新人指導をフォローする。時に笑い上戸になる。

同志　　上官　　部下（ほっとけない）

折口マキ（おりくち）【西田尚美】
（週刊「新世相」編集部記者）

検閲に屈しない姿勢を貫く週刊誌「新世相」の敏腕記者。メディア良化法には常に批判的。玄田とは大学の同期であり、良き同志でもある。

玄田竜助（げんだ りゅうすけ）【橋本じゅん】
（関東図書基地・図書特殊部隊隊長 三等図書監）

堂上や郁の所属する図書特殊部隊の隊長。堂上も苦笑してしまうほどの、言い出したら聞かない豪腕タイプだが、情には厚い。

仁科 巌（にしな いわお）【石坂浩二】
（関東図書基地・基地司令 特等図書監）

図書隊の創設者。「日野の悪夢」と言われる過去の図書館襲撃事件で片足を失っている。柔和な微笑みの中にも強い芯を持つリーダー。

原作者のたっての希望により、仁科は映画オリジナルのキャラクターになっている。原作における図書隊創設者・稲嶺和市というキャラクターは、本映画において故・児玉清が写真出演している

上官（尊敬）

上官（鬼教官）

同期（告白?）

笠原 郁（かさはら いく）【榮倉奈々】

（関東図書基地・図書特殊部隊 一等図書士）

高校時代に自分の好きな本を守ってくれた図書隊員を“王子様”と憧れて、図書隊に入隊してきた熱血新米隊員。男子顔負けの身体能力で、女性初の図書特殊部隊に配属されるも、担当教官の堂上にしごき倒される。直情タイプではあるが、恋には純情な乙女でもある。

同期

手塚 光（てづか ひかる）【福士蒼汰】

（関東図書基地・図書特殊部隊 一等図書士）

新人きってのエリート隊員。新隊員ながら郁とこの手塚だけが図書特殊部隊に抜擢される。堂上に憧れており、その堂上に子供のようにくってかかる郁がとにかく目障りだったが……。

同期（エリート同士）

柴崎麻子（しばさきあさこ）【栗山千明】

（武蔵野第一図書館・業務部 一等図書士）

入隊してきたときに男子隊員の間で話題になった程の新人美人隊員。八方美人な性格を活かし隊内でのあらゆる情報に精通する情報屋。寮では郁と同室で、良き理解者でもある。

同期（友情）

メディア良化委員会
検閲執行部隊 良化特務機関

武山健次（たけやまけんじ）【鈴木一真】

（賛同団体リーダー）

メディア良化法に賛同する団体のリーダー。小田原戦の裏で仁科と郁を誘拐して、図書隊が引き継いだ全資料の焼却を要求する。「日野の悪夢」とも関係があった模様。

Junichi Okada
岡田准一

1980年生まれ、大阪府出身。95年、「V6」のメンバーとして「MUSIC FOR THE PEOPLE」でデビュー。数々のヒット曲を生み出す一方、「学校へ行こう!」等のバラエティー番組でも幅広く活躍。02年、余命半年の草野球チームのリーダーを演じた連続ドラマ「木更津キャッツアイ」がカルト的な人気を集め、2度映画化され大ヒットを記録。またスタジオジブリのアニメ映画『ゲド戦記』(06)、『コクリコ坂から』(11)では声を担当。特殊能力を備えたSPを演じたドラマ「SP」(07)ではプロ顔負けのアクションも体現し、類稀なる身体能力と高い演技力で唯一無二の存在感を示している。

【主な出演作品】『木更津キャッツアイ 日本シリーズ』(03)、『東京タワー』(05)、『フライ、ダディ、フライ』(05)、『花よりもなほ』(06)、『木更津キャッツアイ ワールドシリーズ』(06)、『陰日向に咲く』(08)、『おと・な・り』(09)、『SP 野望篇』(10)、『SP 革命篇』(11)、『天地明察』(12)、『永遠の0』(13)など。

INTERVIEW
インタビュー

――岡田さんは、「ダ・ヴィンチ」の仮想キャスティングで、堂上篤役の1位に選ばれてらっしゃいますが、今回、実際に演じることになり、どう思われましたか?

雑誌に投票結果が載ったときに、普段仕事のことは何も言ってこない母親が、「出演するの?」と聞いてきたんです(笑)。「図書館戦争」のファンらしくて。そのときはオファーがなかったので、「やらないと思うよ」と言ったんですけど、実際にオファーをいただいたので、嬉しくて「やるよ」と報告しました。今回、親孝行ができて良かったです(笑)。その時点で、佐藤監督ということも聞いていたので、10年ぶりにご一緒して自分の変化を見せられればいいなという思いもありました。あとは、プレッシャーももちろんありましたが。有川さんは、キャラクターの描写は豊かだけど、容姿を細かく書かない作家さんだと思うので、その分、作品は人によっていろんな見方ができる。だから、原作にも、原作から派生したアニメにも、キャラクターにも、コアなファンの方がいらっしゃるわけで、その方たちにも「いいね」と言ってもらえるキャラクターを作らないといけないと思いました。

――堂上役についての印象は?

正直、難しい役だなと思ったんです。たとえば人を怒るにしても、相手の周りを歩き回ったり、動きながらセリフを言った方がナチュラルに見えるんですけど、堂上は軍人ということもあり、それができない。ドンと立ったまま動かず、言葉を区切ってはっきりしゃべり、表情だけで表現しなくてはいけないんです。今回はアクションシーンもあるので、動くときは動く、動かないときは動かない、というメリハリを意識していました。あと、(郁の)"王子様"という設定も難しくて。堂上は、無骨だけど、同期や周りからの信頼も厚く、それでいて王子様みたいってどういう感じなんだろうなと(笑)。女性から見ても、男性から見ても、魅力的に見える人じゃないと堂上は成立しないと思ったので、ハードルが高いなと感じました。ツンデレの、デレの部分に関しては特に、監督と細かく相談しながら演じていきました。たとえば、敵のアジトに郁を助けにいくシーンでは、あんなに「無事でいろ」と言っていたのに、助けた後、郁のことを見ないんです。そこも監督と、郁を見たほうがいいか、見ないほうがいいのか相談して。見ちゃうと、「お前は大丈夫か?」というリアクションをとると思いますし、恋愛ものだったら見つめ合いたいところなんですけど、あえて見ない。そういう、ちょっとしたリアクションが堂上っぽさを表現する上で、大事だと思っていました。

――タスクフォースの方々とのチームワークも見事に表現されていたと思います。

この物語は、郁がタスク(フォース)に入る話でもあるから、タスクのチームワークはちゃんと作らなきゃいけないと思い、良い雰囲気が出せるよう、普段からかなり密にコミュニケーションを取っていました。特に、小田原の銃撃戦で戦うときの連携が上手く取れるようにしたかったんです。僕が場を動いた後に誰がフォローに入るのか、その動きが自然に生まれてくる環境を作りたかった。メンバーにはみんなそれぞれキャラクター設定があって、「強いの、誰だっけ?」って撮影前に確認したりして。堂上自身は、あまりニュアンスを出せないので、自分のところ以外での細かいニュアンスを増やしていくことを心がけて。そこも監督と相談しながら、こだわってやらせてもらいました。

――戦闘服姿はテンションが上がりましたか?

30代のうちに、いつか戦闘服が着られるような役をやりたいと思っていたんです。こんなに早くその機会があるとは思っていなくて、すごく嬉しかったです。でも、銃撃シーンやアクションシーンの現場は、時間がない中、これだけ多くのカットを撮りきるのは無理なんじゃないかと思うほどでした(笑)。発砲や弾着となるとすごく時間がかかりますし。でも、僕が子供の頃から映画界で活躍している重鎮のスタッフさんたちが、それを見事に成立させていかれるんです。「ここでリアクションを入れると思います」と伝えたら、本番はそれに合わせた完璧なタイミングで、弾着を飛ばしてくれたり、爆破してくれたりして。今回の現場はそんなすごい方たちとお仕事ができて光栄でした。その上で、若いスタッフもたくさんいて、日本映画を支えているスタッフの力をすごく感じましたね。

――アクションシーンが見どころであることも含め、堂上役は岡田さんにしかできない役だと思いますが、役者として今どんなことを感じていますか?

役者が30代になると、仕事が減るというイメージがあるんですね。若ければ、新入社員の話とか、淡い恋愛の話とかが作れると思うんですけど、30代の、男として一歩踏み出した人たちがメインになる話ってあまりない。20代の頃は、周りの方に受け手をやっていただいて、突っ走る青年役とかを自然に演じられたんですけど、最近は自分の年齢が上がってきて、誰かに影響を与えるような役柄にだんだん変わってきた。そうなると、ちゃんとした技術と心をもって演じないと、お客さんに見透かされると思うんです。昔は、役者の方でも柔道や剣道の有段者の方々が多くて、それが技術や心や人としての器に繋がっていたと思うので、僕も普段からちゃんと生きて、そういうところを目指したいな、と。自分が武術や格闘技を続けているのは、技術と心を学ぶ意味もあるんです。僕がやりたいのは、王道の、ど真ん中のエンターテインメント。ちょっとクセのある作品をやったほうが、評価はされるかもしれませんが、自分が向いていること、日本のエンターテインメントのためにできることを考えると、誰もが楽しめて、誰もが面白いと思えるものを作ることかなと。だから、そんな作品に参加させてもらえるチャンスがあるのなら、そこにチャレンジするべきなんだろうなと思って今は進んでいますね。

1988年生まれ、鹿児島県出身。02年にモデルとして活動をスタート。04年にテレビドラマ「ジイジ～孫といた夏～」で女優デビュー。その後08年にNHK連続テレビ小説「瞳」のヒロイン役に抜擢され、国民的人気を集める。以降、「メイちゃんの執事」(09)、「泣かないと決めた日」(10)、「グッドライフ」(11)、「蜜の味～A Taste Of Honey～」(11)、「黒の女教師」(12)など、数多くのドラマや映画で多彩な役柄を演じわけ、多くのファンを魅了している。4月15日スタートのTBS系連続ドラマ「確証～警視庁捜査3課」(月曜夜8時)に出演。

【主な出演作品】
『僕は妹に恋をする』(07)、『檸檬のころ』(07)、『渋谷区円山町』(07)、『余命1ヶ月の花嫁』(09)、『東京公園』(11)、『アントキノイノチ』(11)、『のぼうの城』(12)、『だいじょうぶ3組』(13)など。

榮倉奈々

Nana Eikura

INTERVIEW
インタビュー

――「ダ・ヴィンチ」の仮想キャスティングで、栄倉さんは笠原郁役の1位に選ばれてらっしゃいますが、今回オファーを受けたときの印象は?

オファーをいただく前に、「ダ・ヴィンチ」のランキングで選んでいただいたという話を聞いていました。その後に、映画化されると決まって、選んでいただけたときは、すごく嬉しかったです。原作は、読むと登場人物たちが自由に動き回っている画が浮かんできて、本当にあの世界があるかのような想像をかきたてられる感じがすごく好きでした。有川先生のファンの方たちにとっても大切な笠原郁役を実写作品で演じさせてもらうのは、プレッシャーもありましたけど、選んでいただいたということを、自信に変えて、責任を感じながらも頑張ろうと思いました。

――郁をどう演じようと思われましたか?

監督とお会いしたときに、郁ちゃんは山で木登りしながら育ったような、ちょっとお猿さんのような女の子をイメージしてほしい、というようなお話がありました。郁は運動神経がいいんですが、私は運動が得意ではなかったので、まずは運動に慣れないといけないと思いました。それで、軍事訓練の専門家の方に、銃を持って走るフォームとか、敬礼、ほふく前進を教えてもらったり、アクション監督の方にアクションとか柔道を教えていただいたりして、何度も練習しました。郁は陸上が得意で、男性顔負けの体力の持ち主。今回は、そういう明確な設定があるので、郁ちゃんに近づくために同じようなトレーニングをするのがまずは最初の役作りだなと思いました。

――郁に共感できる部分はありましたか?

しごかれたときに「くそー!」と思うところとか(笑)、言われたことを「できません」と言いたくないところとか、そういう負けず嫌いなところが、演じてみて似ているところかなと思いました。それ以外の、郁の純粋で不器用なところは、かわいいというか、うらやましいというか、そういう感覚でした。

――自衛隊での撮影で印象に残っていることはありますか?

タスクフォース訓練シーンの撮影の日の朝、すごく朝早くに基地に集合したんですけど、すでに自衛官の方たちは掛け声を出しながらマラソンをしてらっしゃって、こういう感じで、自衛隊の方々は毎日過ごしているんだなと実感しました。それで、「私も自衛隊員なんだ」と思いながら、テンションを上げて(笑)。自衛隊の動きは、決まりごとが多いんですよね。それに、銃を持ちながら走るのはすごく難しいんです。ところが、完成した映画を見たら、堂上教官が、姿勢を崩さないで前にいる敵に向かって撃ちながら坂を滑り降りるカットがあって、本当にすごいなと思いました。一度、自分で体験してみるとそのすごさがよくわかります。そういう難しい動きを難なくこなしている岡田さんはさすがだなと思いました。

――トレーニングでしごかれるシーンやアクションシーンは実際に撮影してみていかがでしたか?

今回が私にとって、初めての本格アクションもある作品だったので、トレーニングシーンもアクションシーンもすごく過酷でした。タスクフォースになってからのトレーニングシーンは本当に体力面でも、精神面でも、追いこまれたシーンでした。もう「あきらめたら終わってしまう」みたいな感じで(笑)。完成した映画を見ていても撮影を思い出して、奥歯を噛み締めてしまいますね(笑)。でも、カッコよく撮ってもらっていたので嬉しかったです。

――栗山さん演じる柴崎とのシーンはナチュラルな雰囲気がありましたね。

堂上教官とか、小牧さんとか手塚とか、男だらけの世界にいることが多かったので、栗山さんとのシーンはまた違う映画のような感じがしました(笑)。二人のシーンは郁も普通の女の子なんだ、という感じが出ている重要なシーンだと思います。監督は、アクションシーンを撮るときと、女心の複雑な心情を撮るときで雰囲気が微妙に違ったような気がしました。女同士の、言葉にしないような本音もすごく理解してくださって、「監督は、そんな女心も理解されているんだ」と思ったりしました(笑)。

――アジトでの戦いの後、堂上と再会したときの涙は?

涙が出たのは、予想外という感じではなかったんです。3日間大変なシーンを撮り続けた後のラストのシーンだったので、すべてが終わったっていう思いもあったかもしれません。やっと一区切りついて寝られる、みたいな(笑)。でも、それは、郁ちゃんにとってもそういうシーンだったと思うんです。やっと一つの戦いが終わったっていう。今回の映画は、私は郁の成長の物語だと思っていました。郁にとって、入隊してからの一つめの節目は、堂上に本気でビンタされた後に、「茨城に帰れ!」と言われたところだと思うんです。そこで自分に問題があることに気づき、どうやって乗り越えていこうかという思いが芽生える。そして、もう一つの節目が、あそこで戦いの後、堂上に、「よく頑張ったな」と褒めてもらえたときだったのかなと。

――映画をご覧になった感想をお願いします。

迫力がすごかったです。それに、何分かに1回、映画のジャンルが変わるんですよね。恋愛から生身のアクションになり、ヒューマンになり……っていうように。だから、本当にあっという間に時間が過ぎてしまって、盛りだくさんの映画に完成したと思います。それをこだわりを持つ佐藤監督が撮ってらっしゃるので、映画好きの方にも楽しんでもらえると思いますし、もちろん原作ファンの方にも、男子にも女子にも、少年少女にも(笑)、ぐっとくるポイントがあると思うので、たくさんの方に楽しんで見てもらえたら嬉しいです。

田中圭

Kei Tanaka

1984年生まれ、東京都出身。ドラマ「ウォーターボーイズ」(03)で注目を集める。以降も、話題のドラマに数多く出演を続け、近年の出演作に「ドクターX～外科医・大門未知子～」(12)、「ビブリア古書堂の事件手帳」(13)などがある。また、舞台、映画でも幅広く活躍。主な出演映画に、『東京大学物語』(06)、『凍える鏡』(08)、『TAJOMARU』(09)、『ラブコメ』(10)、『ランウェイ☆ビート』(11)、『アフロ田中』(12)、『みなさん、さようなら』(13)、『相棒シリーズ X DAY』(13)などがある。

――小牧は人気キャラクターの一人ですが、原作を読んだときの印象はいかがでしたか?

「図書館戦争」は、フィクションの世界ですけど、登場人物それぞれにドラマがあって、どのキャラクターに対しても感情移入でき、愛着が持てて、とにかく読んでいて楽しいんですよね。原作を読んでいると、自分以外のキャストの方の顔は、登場人物として頭に浮かぶんです。堂上は岡田くんだし、郁は奈々ちゃんで。でも、自分で自分の顔は浮かばないので(笑)、映画の小牧を自分なりに演じようと思いました。小牧は優しいし、"笑う正論"という異名を持つほどですから、基本的には笑っていますけど、実は堂上より厳しい一面もある。今回の登場シーンの中で、どこまで小牧らしさを出せるかは、考えましたね。

――岡田さん演じる堂上とは、いいバディ関係でしたね。

僕自身、岡田くんのことが大好きですしね。岡田くんはカメラが回っていないところでも役づくりをしながら現場にいる方なんです。現場では、基本的にいつも一緒にいました。アクションシーンの動きや連携プレーなどは、「じゃあ、こうしよう」と確認しあったりして。それはタスクフォースのみんなともそうでした。どう動けばより効率がいいか、それがどう見えるか、アイディアを出し合ったのが、すごく良かったと思います。岡田くんは、タスクフォース全員を共演者であると同時に、仲間である、という捉え方をされていたんですよ。その感覚はすごく素敵だなと思ったし、そんな方が主演でいることは、チームとしても、作品としても、すごく良いことだなと思いました。佐藤監督も、癒し系というか、堅いものを丸くしてしまうような方で、たとえ現場がピリッとしても監督がいらっしゃると和んだりする。マイペースでいてみんなを引っ張る監督を見ると、僕もついて行こうっていう気になりました。

――銃撃戦では、小牧はすばやく床を滑っていましたね。

あれも現場で突然決まった動きです。エスカレーターを滑り降りたのも、軽い気持ちでやってみたら、「それ、いいね!」となって(笑)。あと、現場で浮かんだといえば、小牧の死んだフリがあります。銃撃を受け、(堂上に)「小牧!」って言われたときの状態、あれは僕の中では死んだフリなんです(笑)。

――アクションシーンをもっと撮りたいと思われたのでは?

そういう気持ちになりましたね。原作の小牧は、堂上とどっちが強いのかと言われるような男なんですよ。僕は勝手に、続編があると思っているので、そのときのために今からアクションの練習をしておこうと思ってます(笑)。

――最後に、映画をご覧になった感想をお願いします。

すごく面白かったです。アクションシーンも迫力ありましたし、岡田くんのアクションもカッコいいし、観ていてスカッとするし。なのに、観ているとなぜかわからないけど涙が出たので、それだけ胸を打つものがこの作品にはあるんだな、と。基本的に郁目線で観る映画だと思うのですが、男の僕も感情移入することができました。それは奈々ちゃんのお芝居が素晴らしかったんだと思います。

——『図書館戦争』の出演が決まって思ったことは?

脚本や原作を読んで、早く撮影に入りたいと思うと同時に、先輩方と一緒ということで、すごくプレッシャーを感じました。現場に入ってみると、皆さん温かく話しかけてくださって、とても過ごしやすく、多くのことを学ばせていただきました。また、手塚光は原作やアニメを見て、カッコよくて、かわいいなと思った役だったので、演じることができてすごく光栄でした。

——演じる上で心掛けたことは?

原作、アニメ、そしてもちろん台本から、自分が「いいな」と感じた手塚を思い描きました。あとは、エリートでしっかり者の部分を基本として残しつつ、自分の良さも出せればと思いながら演じていました。監督からは「好きも嫌いも含めて、郁のことを想い続けて」と言われていたので、そこも心掛けました。撮影前に軍事訓練のトレーニングを受けさせてもらいました。体作りは、この作品に入る前からずっと続けていたのですが、"気をつけ"は一番キツかったです。全身に力を込めないといけないですし、みんなで動きを揃える緊張感もあって。"休め"のときも、手を後ろで組んで、ずっと力を込めている状態だったので筋肉痛になりました(笑)。

——自衛隊の射撃訓練場で撮影された、銃を撃つシーンは演じてみていかがでしたか?

昔からカッコよくて憧れていたので嬉しさと同時に緊張しました。かなり的が遠いなと思ったのですが、実際の訓練ではもっと遠いと教わって、それだと絶対に当てられないと思いました。けど、手塚はそれができる設定。すごいなと思いました(笑)。戦闘服にも憧れがあったので、衣裳合わせのときはテンションが上がりました。着た瞬間にカッコいいなと思いましたし、銃を持つとさらに自分が強くなった気分になりました。

——手塚は堂上に憧れている設定ですが、岡田さんと共演していかがでしたか?

自分もアクションをやってみたいなと思っていたところに、共演させていただいて、より刺激になり、いつか自分も岡田さんのようにアクションができる俳優になりたいと強く思いました。柔道場のシーンの撮影の合間には、後ろ回し蹴りや関節のとり方など、いろいろ教えてくださいました。とっても嬉しかったです。あと、堂上教官に、「正論を武器にするのは正しくない」と言われるシーンは、岡田さんの目がクッ!とこっちに向いて、エリートの手塚も納得せざるを得ない、その目にやられました。一緒に演じていると、演じる以上の感情を引き出してくださるんです。とても勉強になりました。

——ちなみに、タスクフォースの方とは一緒に過ごす時間が多かったのですか?

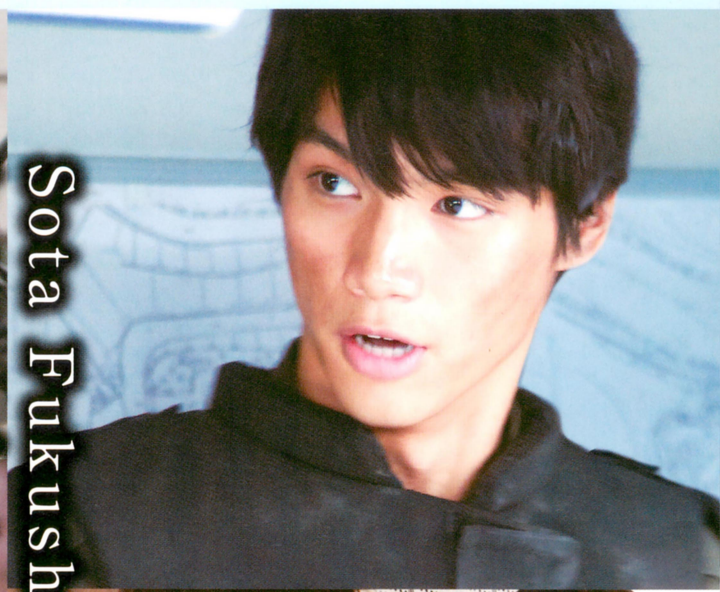
はい。僕だけ10代だったのですが、皆さんよくしてくださって、撮影の合間はいろんな話をしました。

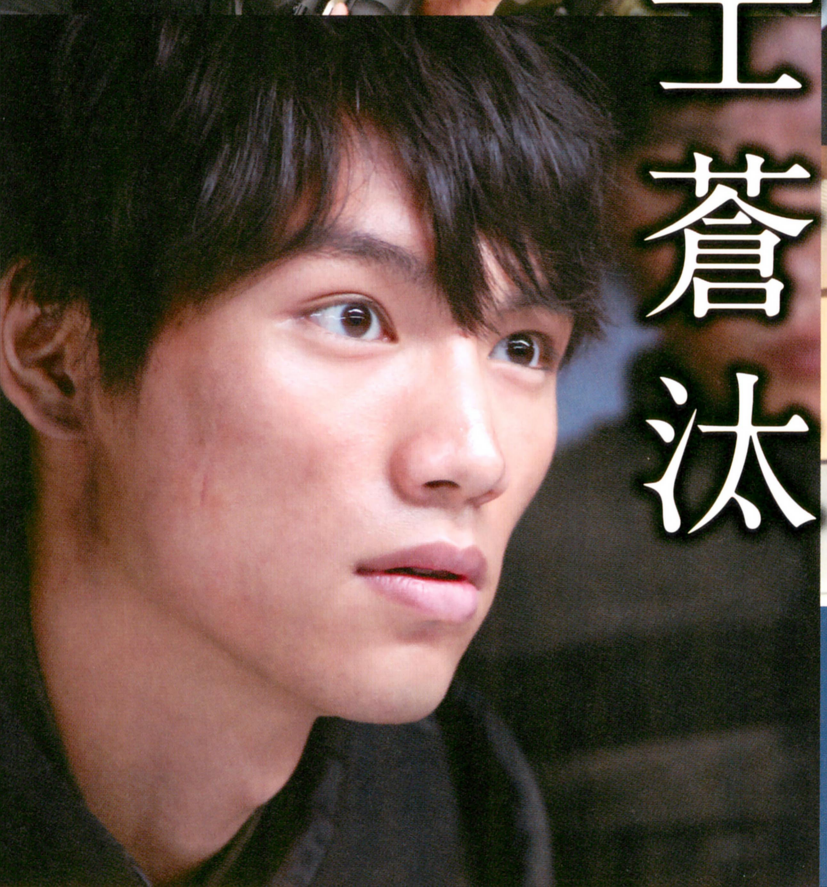
——最後に、映画をご覧になった感想をお願いします。

面白かったです!(笑)。このキャラクターたちはこれからどうなっていくんだろうっていうのが気になって、もっと見ていたいと思う作品でした。もちろん手塚としても、原作では柴崎との展開がまだまだありますから、今後どうなるのか自分でも見てみたいと思いました。

福士蒼汰

Sota Fukushi

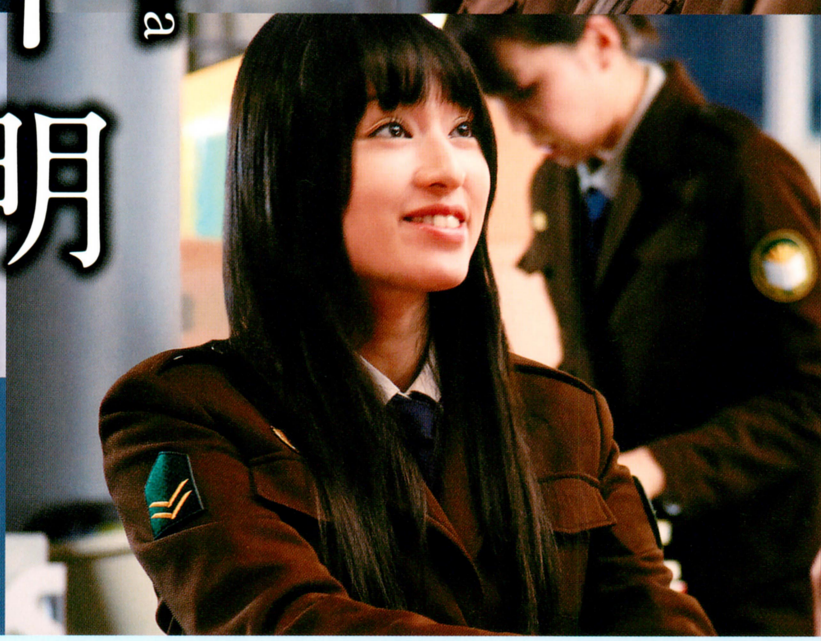




1993年生まれ、東京都出身。ドラマ「美咲ナンバーワン!!」(11)でデビュー。「生まれる。」(11)、「シマシマ」(11)にレギュラー出演後、「仮面ライダーフォーゼ」(11)の主人公・如月弦太朗役でテレビドラマ初主演。主な映画主演作に、『ぼくが処刑される未来』(12)、『江ノ島プリズム』(13年夏公開予定)などがある。13年4月よりスタートしたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」に出演。

栗山千明

Chiaki Kuriyama



1984年生まれ。5歳から芸能活動を始める。99年、映画『死国』で女優デビュー。『バトル・ロワイアル』(00)で鮮烈な印象を残し、クエンティン・タランティーノ監督作『キル・ビルVol.1』(03)でハリウッドデビューを果たす。主な映画出演作に、『スクラップ・ヘブン』(05)、『エクステ』(07)、『KIDS』(08)、『GSワンダーランド』(09)、『鴨川ホルモー』(09)、『ハゲタカ』(09)、『劇場版 SPEC～天～』(12)、『劇場版 SPEC～結～』(13)などがある。

――オファーがあったときの印象は?

アニメの「図書館戦争」の柴崎が私に似ていると人づてに聞いて、アニメを拝見していたんです。いつか実写になるならこの役が演じられたらと思っていましたので、今回、柴崎役をいただいて本当に光栄で、嬉しかったです。今までに味わったことのない喜びでした。

――実際、柴崎のルックスは、栗山さんがモデルだそうですね。

現場に入ってから有川先生とお会いしまして、(「図書館戦争」の装丁の際のイラストビジュアルを)“栗山千明をモデルにしてほしい”と言ってくださったと伺い、嬉しいなと思いました。それと、先生は現場で、撮影の合間に私と(榮倉)奈々ちゃんが話している様子が、本当に笠原と柴崎に見えると言ってくださって、それが何よりも良かったなと。すごくほっとしましたし、よし頑張ろうという気持ちになりました。

――柴崎のキャラクターをどう捉えましたか?

柴崎は、すごく個性的な印象があり、私の方が普通だなと思ってました(笑)。たとえば柴崎は、堂上に「あたしなんかどうです?」と言ったりしますが、冗談か本気かわからないですよね(笑)。私だったらとても恥ずかしくて言えないです。自分とのギャップを感じて大変な部分はありましたが、ビジュアル面では、モデルと言ってくださっている分、作りやすい部分もありました。岡田さんの堂上も、榮倉さんの郁も、他の共演者の方々も、本当に原作から抜け出したかのように自然に演じてらっしゃったので、私も作り込み過ぎず、いただいた役を私なりに演じるようにしました。

――セリフの印象をお聞かせください。

これは、柴崎のキャラクターから来ているんだと思いますが、たまに、なかなか日常生活では言わないようなセリフがあって。たとえば、「ここに乙女がいます、軍曹!」っていうセリフは、台本を読んだときに、どんなテンションで言ったらいいのかなと考えました。リアルとは少し離れたセリフなので言い方が難しくて。現場で、監督にもご指導いただきながら、こんな感じかな、って何度か練習しましたね。柴崎の、ちょっと気取っているように見えて、実は郁を大好きなお茶目な感じが面白いなと思いつつ演じました。

――佐藤監督の演出はいかがでしたか?

こう演じてほしいと要求されるのではなく、私たちのお芝居を見て、アドバイスをくださるんです。ナチュラルで、ほんわかした方でした。いつもiPadを駆使されていたのも印象に残ってます。

――撮影を振り返っての感想をお願いします。

あっという間でした。柴崎は戦闘シーンがないので、今回、他のキャストの方々が戦う姿を現場で見て、ちょっとうらやましいなという気持ちもありつつ、「みんな頑張れ!」と思っていました。映画ができあがるのがすごく楽しみでしたね。実際、完成した作品を観たら、「アクションシーンは、こんな感じになるんだ!」と本当に楽しむことができたので、映画をご覧になる方々にも楽しんでいただければいいなと。それから、女性の方には、郁と柴崎の友情に共感していただけるのではないかなと思います。

——最初にオファーがあったときはどう思われましたか？

実はずいぶん前に原作を読んでいたんです。巻末に児玉さんと有川さんの対談が載っていて、それが面白くてね。その映画だったらぜひ出たいということを申し上げたら、「実は役としては、稲嶺の遺志を継いだ、原作にないオリジナルキャラクターです」という説明があって、なるほど、それはすごくいいアイディアだなと思いました。他のキャストの皆さんは、キャラクターが原作にあって、マンガやアニメにまでなっているわけですが、仁科はそれがないので他の方より演じやすかったかもしれないですね。稲嶺の遺志を継いでいるということを押さえつつ、映画で初めて生まれたキャラクターとして演じればいいと思っていました。

——稲嶺役のモデルの児玉清さんとは以前から親交がおありで。

児玉さんとはすごく長いんです。最初にご一緒したのが東芝日曜劇場で、まだテレビが白黒の頃でした。その後がドラマ「ありがとう」(70)です。第2シーズンの「看護婦編」(72)で三兄弟を演じたんですが、長男の龍之介が児玉さんで、僕が次男の虎之介、岡本信人が一番下の鉄之介でした。三人とも不思議なことに、男の兄弟がいなかったんですよ。だから、嬉しくてしょうがなくて、仕事もないのに三人で遊んだりして、一年間本当に楽しかった。その後もずっとお付き合いがあり、いつも兄さんと呼んでいましたからね。児玉さんはまさに読書家という言葉がぴったりくる人で、「この本は面白いよ」と教えてもらって読んだ本もたくさんあります。

——それで今回、稲嶺を慕っていた仁科を演じるというのは、運命的なものも感じられましたか？

それはありましたね。これはしっかりやらないと怒られるかな、と(笑)。たぶん、「図書館戦争」が映画になったら、児玉さんは、ご自分で稲嶺を演じる気だったんじゃないかな、と思うんですね。だから僕も、「仁科は自分がやらないといけない。他の人には渡せない」という思いはありました。児玉さんは他の人にやってもらいたかったかもしれないけど(笑)。児玉さんにも完成した映画を観てもらいたいですね。もしかしたらもうどこかで観たかもしれない。試写会にいたかもしれない(笑)。

——仁科のセリフには、ぐっとくるものが多かったですね。

この作品のテーマである“表現の規制への抵抗”のメッセージを伝える役割をほとんど仁科一人で引き受けているところがありました。仁科が語らないと伝えたいことが伝わらないので、非常に責任を感じながら演じました。

——図書隊の創設者である仁科のその後も気になります。

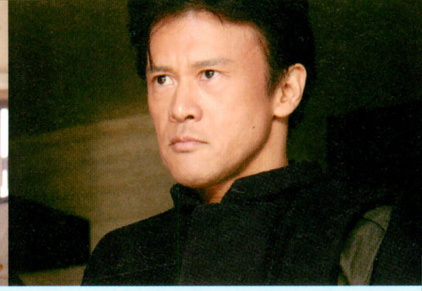
歴史的にはこういう人は意外と多くいたと思うんですね。上に立つ者を失った側近と言えば、たとえば、豊臣秀吉がいます。彼も(織田)信長亡き後、どうしようかと考えたはずで。後を継ぐ人がしっかりした組織は生きるんですけど、そうでないと衰退しますから、そういう意味で、今後の仁科や、図書隊はいったいどうなるんだろうと気になりますね。

石坂浩二

Koji Ishizaka

1941年生まれ、東京都出身。慶應義塾大学法学部在学中の62年、ドラマ「七人の刑事」で俳優デビュー。69年、NHK大河ドラマ初のカラー作品となった「天と地と」で主人公の上杉謙信を演じる。その後も、「ありがとう」シリーズ(70、72～75)ほか数々のドラマに出演し人気を博す。映画は、76年、『犬神家の一族』で演じた金田一耕助役が当たり役となり、06年のリメイクを含め、6作品で金田一を演じた。近年の主な出演映画に『日本沈没』(06)、『私は貝になりたい』(09)、『沈まぬ太陽』(09)などがある。

橋本じゅん
Jun Hashimoto



1964年生まれ、兵庫県神戸市出身。大阪芸術大学芸術学部在学中に劇団☆新感線に参加。以降、劇団になくてはならない存在となる。その他、劇団公演以外のミュージカルやシェークスピア作品など多数出演し、その個性を発揮している。テレビでは、NHK朝の連続テレビ小説「ひらり」(92)で知名度を上げ、その後もコンスタントに出演。近年では、「恋愛ニート～忘れた恋のはじめ方～」(12)、「ハングリー！」(12)、「火怨・北の英雄 アテルイ伝」(13)などに出演している。

――オファーを受けたときのお気持ちをお聞かせください。

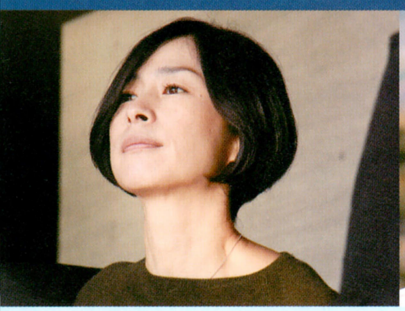
普通に驚きました。「えっ?！俺っすかあ！」と。演じる上では、なんだか超人的過ぎる印象の玄田隊長をあえて超人間味のある、多面的なひとりの男に近づけたいと思いました。

――共演者の方々の印象は?

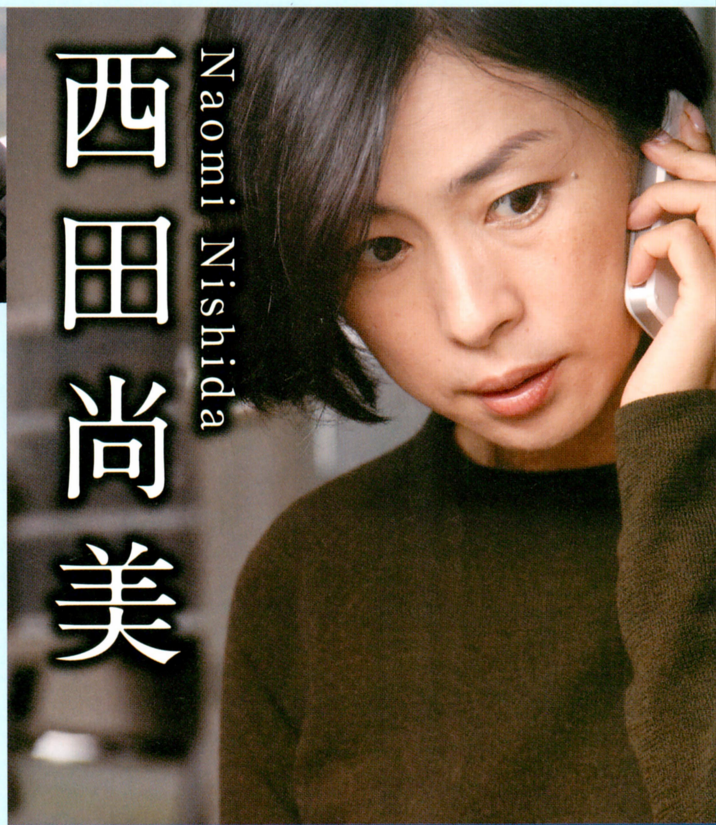
過去何回か共演したときの岡田君とは別人でした。継続は力なり。プロ意識のあまりの高さに背筋が伸びました。榮倉さんは男臭い現場であまりにピッカピカで眩しかったです。岡田君と同じくらい共演してた栗山千明ちゃんとは今回初めて現場でお話ししたって感じですが役者としての心の響きの豊かさ、鋭さに是非またご一緒できる機会を楽しみにしています。……あれ、なんか上から目線になってますか(笑)?いえいえリスペクトです。

――今回の現場を振り返っていかがでしたか?

タスクのメンバーが本当に和気あいあいながらも、体育会系な団結と統制で最初から最後まで図書隊になっていたのが印象的です。佐藤監督とは、もうこれが自分の映画デビューなんだってくらい突っ込んでお話しさせていただき、いつまでもカットをかけない監督の現場は楽しくて楽しくて、クランクアップのとき切なかったです。これが50代を来年に控えた俺の、苗字と名前のある人間役としての銀幕デビューです。俺の遅すぎるスタートの目撃者になってくださいませ。きっと何年後かに、おっ!あの野郎もずっとコツコツやってンなあ!と笑って頷いてもらえるよう楽しんで生きていきます。映画の現場って本当に最高です。『図書館戦争』、最高だったあの現場のリアルが観客の皆様へ伝わることを願いつつ……。



西田尚美
Naomi Nishida



――折口役でオファーを受けたときのお気持ちをお聞かせください。

人気の小説でしたので、すごく嬉しい半面、折口さんのイメージと違うと思われたらどうしようという不安もありました。演じる上では、折口さんの毅然とした雰囲気を大切にし、私の普段の天然ぶりを出さないように心掛けました。

――共演者の方々の印象は?

岡田さんはとても真面目な印象を受けました。役作りが完璧だったように思います。玄田役の橋本じゅんさんはとてもシャイな感じがしました。お二人とも、制服が似合っていて、二枚目でした。

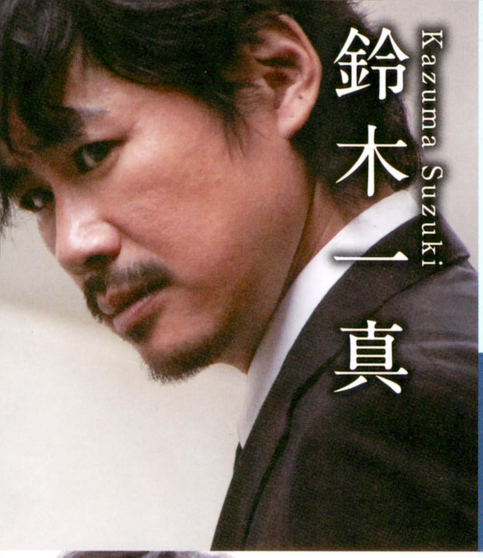
――前線で図書隊の戦いを取材する折口を、あの衣裳を身につけて演じてらっしゃる姿がカッコよかったです。

とにかくヘルメットやカメラバッグなど装備がたくさんある上に、ウエストにたくさん物をつけていたりして、ズボンがずり落ちるのではとハラハラしていました(笑)。カッコいい折口さんにしたかったので、そこは気をつけましたね。着心地は良かったです。格好よく見えますし。

――佐藤監督とのお仕事を振り返っていかがですか?

監督は演出が的確で、大変お仕事しやすかったです。演技がイメージしやすかったですし。同じ広島県人でしたので、広島話も楽しかったです。とても楽しい現場でした。

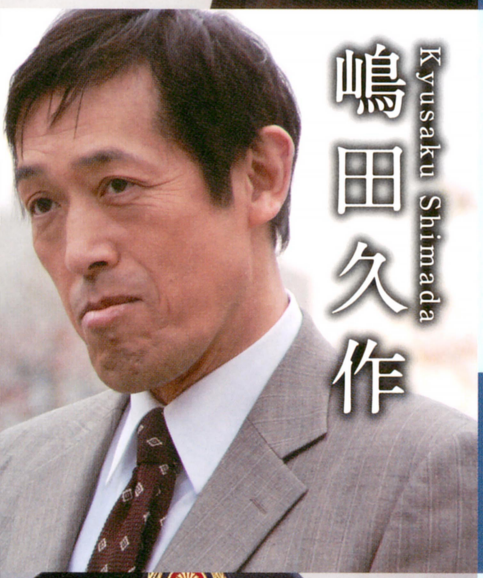
1970年生まれ、広島県出身。CMや雑誌のモデルとして活躍後、93年に女優に転身。映画、テレビドラマ、CM、舞台などに幅広く出演。主な映画出演作には、『ひみつの花園』(97)、『ナビィの恋』(99)、『OUT』(02)、『電車男』(05)、『ハチミツとクローバー』(06)、『南極料理人』(09)、『綱引いちゃった!』(12)。待機作に『真夏の方程式』(13)などがある。



鈴木一真 Kazuma Suzuki

原作を熟読し、武山が映画オリジナルのキャラクターと理解し胸が躍りました。最初の打ち合わせではファーストシーンから登場するかもしれないとおっしゃっていた監督ですが、ガスマスクをつけたりミサンガのアップばかり撮るので「最後まで顔が出ないかも……」と不安にかられたのを覚えています。完成した映画を見たときは、その不安も取り越し苦労に終わり、カメラ、照明、音声、衣装、メイク、特殊効果など全てが素晴らしく、また、現場がかなりキツいと思っていたことが恥ずかしいほど、他のキャストの皆様は体力と気力を何十倍も消耗されていたのだろうと感じました。武山は亡くなった訳ではないので、もし続編があれば登場して更に暴れたいと思いました。

1968年生まれ、静岡県出身。87年にモデルデビュー。90年のパリ進出後、本格的にモデル活動を行い、ミラノ、ロンドン、ニューヨーク等へも進出。多くの実績を残し95年俳優デビュー。98年よりPV等の脚本、監督も経験し、03年短編映画「監督感線～KENENN（懸念）」が劇場公開された。近年の主な出演作に、『BANDAGE』（10）、『コトバのない冬』（10）、『ライアーゲーム ザ・ファイナルステージ』（10）、『恋愛戯曲～私と恋におちてください。～』（10）、『LIAR GAME 再生』（12）などがある。



嶋田久作 Kyusaku Shimada

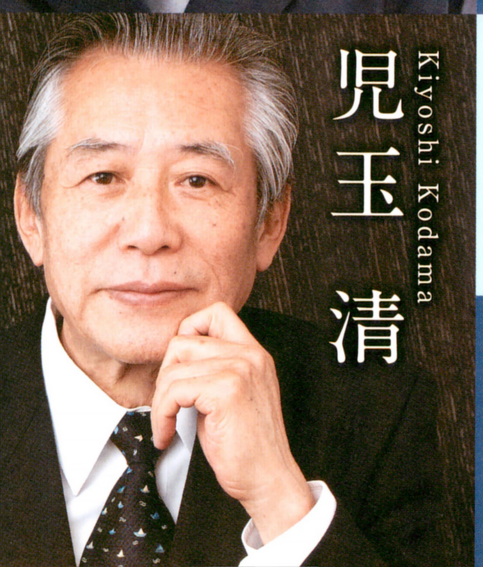
佐藤監督とは『修羅雪姫』以来、12年ぶりにご一緒しました。お互い年を取りましたが、最初にお会いしたときと印象は変わりませんね。緻密で粘り強く、ご自身のプランを分かり易く伝えてくださるコミュニケーション能力の高さ、演じる側の心理を読み取り、決して無駄なプレッシャーを与えない。口幅ったいですが信頼の置ける監督さんです。僕が演じた平賀警部補は、ベテランの叩き上げ、組織に従順な人物というより、職務をこなしている実務家といったところです。「日野の悪夢」には複雑な思いがあり、面には出しませんが仁科司令には敬意の念を抱いているのではないですかね。矛盾するようですが、演技の上では平賀の真意がどこにあるのかはっきりしないように心掛けました。

1955年生まれ、神奈川県出身。『帝都物語』（88）の魔人・加藤保憲役で映画初出演。強烈な存在感で話題を集め、『帝都大戦』（89）でも同役を演じ好評を博す。その後も、個性派俳優として、映画、テレビドラマ、CM、舞台と幅広く活躍を続ける。近年の主な出演作に『ハゲタカ』（09）、『南極料理人』（09）、『スープ・オペラ』（10）、『武士の家計簿』（10）、『ヘブンズストーリー』（10）、『洋菓子店コアンドル』（11）、『キツツキと雨』（12）、『くちづけ』（13）などがある。

相島一之 Kazuyuki Aijima

尾井谷隊長というのは、権力側を象徴する人物で、叩き上げというよりエリート官僚のキャリアです。橋本じゅんさん演じる玄田と昔の侍のようなやり取りができたらなぁと思いました。悪役、敵役にも理屈がある。それを大事にしました。佐藤監督とのお仕事はとても楽しかったです。こちら側のアイディアをどんどん取り入れてくださってスリリングでした。もっとたくさんお仕事をしたかったです。台本をiPadで携帯されているのが印象的でした。撮影現場で印象に残っているのは、「良化特務機関の野戦トラックが、土煙を上げてやってくる」という、台本で1行のシーンを、エキストラを200人以上集めて大がかりな撮影をやったときです。ああ映画だなぁと感動しました。

1961年生まれ、埼玉県出身。立教大学在学中に劇団テアトルジェンヌに入団。87年に東京サンシャインボーイズに入団し、94年の「罠」まで全公演に出演する。舞台のほか、テレビドラマ、映画にも数多く出演。近年の主な出演作に、『星砂の島の小さな天使』（10）、『DOG×POLICE 純白の絆』（11）、『ステキな金縛り』（11）、『ウタヒメ 彼女たちのスモーク・オン・ザ・ウォーター』（12）、『県庁おもてなし課』（13）などがある。



児玉清 Kiyoshi Kodama

読書家であり、書評家でもあった俳優・児玉清。有川浩との出会いは、雑誌の対談相手に児玉が有川を指名したこと。文庫版「阪急電車」（幻冬舎文庫）では児玉が解説を執筆、そして「『図書館戦争』シリーズ①～④」（角川文庫）では有川との対談が実現している。有川は児玉をモデルに稲嶺和市を執筆した。「児玉さんと最後にお話ししたときに、『実は、稲嶺のモデルは児玉さんです』とお伝えしたら、『本当ですか？まいったな』と嬉しそうに笑って帰っていかれました。お伝えできてよかったと今でも思います」（有川浩）

1934年生まれ、東京都出身。学習院大学文学部ドイツ文学科卒。58年に東宝入りし、東宝第13期ニューフェイスとしてデビュー。67年にフリーに。映画やテレビドラマに数多く出演する一方、75年に始まったクイズ番組「パネルクイズアタック25」では36年間、司会を務めた。また、読書家として知られ、数多くのエッセーや書評も執筆した。11年5月、77歳で死去。著書に「寝ても覚めても本の虫」（01／新潮社）、「たったひとつの贈りもの―わたしの切り絵のつくりかた」（03／朝日出版社）、「負けるのは美しく」（05／集英社）、「児玉清の『あの作家に会いたい』―人と作品をめぐる25の対話 」（09／PHP研究所）、「すべては今日から」（12／新潮社）、「人生とは勇気 児玉清からあなたへラストメッセージ」（12／集英社）、「ひたすら面白い小説が読みたくて―文庫解説コレクション」（13／中央公論新社）など。

801
850

佐藤信介

Shinsuke Sato

1970年生まれ、広島県出身。武蔵野美術大学在学中に、脚本・監督を務めた16ミリ短編映画『寮内厳粛（りょうないげんしゅく）』が「ぴあフィルムフェスティバル94」でグランプリを受賞。01年の『LOVE SONG』で監督メジャー・デビュー。その後、『修羅雪姫』（01）、『COSMIC RESCUE The Moonlight Generations』（03）、オムニバス映画『いぬのえいが』（05／「恋するコロ」を監督）、『砂時計』（08）、09年、モントリオールファンタジア国際映画祭にて長編アニメーション部門特別賞、第14回ソウル国際カートゥーン&アニメーションフェスティバル長編部門審査委員特別賞を受賞した『ホッタラケの島～遥と魔法の鏡～』（09）、2部作として映画化された『GANTZ』（11）、『GANTZ PERFECT ANSWER』（11）などを監督。脚本家としても『ひまわり』（00）、『春の雪』（05）、『県庁の星』（06）など数多くの作品に携わっている。また、12年には、フジテレビ連続ドラマ「ラッキーセブン」（1月～3月）のシリーズ構成・演出を担当した。

――『図書館戦争』の監督オファーを受けたときどう思われましたか？

声をかけていただいたのが、『GANTZ』の後で、次はどんな作品を撮ろうかと考えていた頃でした。以前から、「図書館戦争」は、世界観が面白く、想像力に溢れた魅力的な作品だと思っていたんです。僕自身、現代を舞台にしているのにどこかファンタジックだったり、逆にぶっ飛んだSFだけど現代的でリアルな部分もあったりするような作品が好きなので、「図書館戦争」は自分のツボにハマる世界観でしたし、本当に撮ってみたいと思う作品でした。

――近未来のパラレルワールドが舞台となりますが、どのように描こうと思われましたか？

最初に考えたのは、現実にはない世界を、リアルとフィクションの狭間をいくように描きたいということでした。ビジュアル的には、図書館に軍人が銃を持って立っている、そしてそこで戦っているという異世界感が画面で映せたら面白いんじゃないかと。それにより、映画のフィクション性が飛躍していけるのではと思ったんです。第二次世界大戦を題材にした、当時そこに生きた若者たちの姿を描くのと違って、現代に生きる僕らみたいな等身大の普通の人たちが、現代の戦闘服を身にまとって、僕らが知っている場所で戦う話というのは、なかなか映画ではなかった。特殊な世界観を作り上げている「図書館戦争」だからこそ、それができるのが素敵だなと思いましたし、挑戦でもありました。

――主な舞台となる図書館の設計については？

作品の顔になる空間がほしいと思っていたんです。ですから、最初に、なにはともあれ図書館がどういう感じなのかというところから考え始めて。セットでデザインするのか、ロケ地を探すのか、いろいろ考えた末、最終的にはいくつかのロケ地を組み合わせ、ロケセットやCGを混ぜる感じで、その異世界を作ることができました。

――アクションやラブ、人間ドラマなど、さまざまな要素のバランスをどう取られましたか？

たとえば『華氏451』(66)みたいにハードな世界として描くこともできたと思うんです。でも、「図書館戦争」はハードな一面と、キュートな一面が渾然一体となっているのが魅力です。だからまずは、それを映像的に表現することが目標でした。だから脚本を練る過程でも、編集しているときも、ハードな面とキュートな面をどう表現するかのバランスは練りましたね。考え方として、そもそも、戦争が始まるからといって、全員が眉間にしわを寄せているような世界ではないかもしれない、という想いがありました。戦いだけを生真面目にやっていくストイックな世界ではなくて、その中でやっぱり、元気いっぱい頑張っている若者たちがいるはずだと。それこそがリアルなことなんじゃないかと思って撮っていました。そこは、上手くいけたかなと。主人公たちの物語にはすごく惹かれましたし、原作にある生っぽさ、リアルっぽさは、描いてみたかった。僕はもともと日常的なディテールをリアルに描くのが好きなので、そういうところが撮っていて面白かったですね。加えて、アクションも好きですから、そういう意味でも、まさに自分にとってツボに入る世界観でした。

――岡田さんと榮倉さんは「ダ・ヴィンチ」の仮想キャスト1位ですが、お二人のキャスティングの印象をお聞かせください。

最高のキャスティングだなと思いました。この映画は、荒唐無稽な設定の世界で、戦いもあり、ほのかな恋愛も含んだ青春群像もあったりと、いろんな要素があるので、その世界のリアリティだけでなく、キャラクターのリアリティも必要でした。そこは岡田さん、榮倉さんに堂上と郁を演じていただけるということで、間違いないな、と。これでまず第一歩目が成功したという思いはありました。そのリアリティに負けないリアリティが周りに欲しいということで、僕らスタッフは目一杯がんばっていたわけですけど。岡田さんや榮倉さんには、「これは本当に一本の映画なのか？」っていうぐらいいろいろなことをやっていただきました(笑)。

――オープニングからリアルな雰囲気で引き込まれました。

近未来モノ、異世界モノでよくあるのは、冒頭にテロップでその世界の状況をわかりやすく説明すること。「この世界は、本が検閲される世界で～」とテロップを一枚スクリーンに出してしまえば、わかりやすいし、すぐ理解してもらえることなんですが、今回は過去の日本から分岐して、徐々に違う歴史を歩み始めたパラレルワールドだということをちゃんと映像で見せたかったんです。そこは、シナリオ段階からずっと試行錯誤していて、最終的には、自分が思い描いていたものができたなと思っています。

――武器もかなりリアルでしたね。

現代にある武器を使って日本で戦う作品、しかも日本人同士が撃ち合う作品はほとんどないので、ぜひ一度やってみたいという思いはありました。有川先生の原作は、銃器に関しての記述が詳細で、こだわりを持ってらっしゃるんですよ。ですから、映画でも、もう一つの見所としてこだわりたかったんです。図書隊は自衛隊のお下がりを使っているという軍隊的なテイストがあり、対する良化隊は警察機構から派生したイメージで、SAT(特殊急襲部隊)的な雰囲気を持たせました。銃にも、銃の発光の色にもかなりこだわりました。音に関してもリアルとリアルではないものの狭間を狙っています。

――それぞれのキャラクターが生き生きしていましたが、演出の上で監督が意図されたこととは？

キャラクターが立っている作品というと、オーバーに作り込む形でやることもありますが、今回は、そうではなくて、このキャラクターたちが実際にどこかに存在しそうな、リアルな雰囲気を醸すことを目指していました。キャスティングも、ご自身にそのキャラクターの要素がありそうな方にご出演いただけました。その人のいいところが、キャラクターとして自然に出る形を目指していました。どの役者さんも、ご自分のキャラクターを熟知されて演じられていたので、すごくリアルな群像劇になったなと思います。

――『図書館戦争』が観客の方にとって、どういう作品になってほしいですか？

映画が終わったら、もうこの世界の登場人物には会えないわけじゃないですか。岡田さん、榮倉さんはいるけど、堂上と郁はどこにもいない。図書館に行っても図書隊はいないし、『図書館戦争』の世界はないわけです。でも、映画館にいる間は、堂上や郁たちと出会って、一緒にこの世界を体感してもらえるわけで。観終わったときに、またこの登場人物たちと会いたいなと思ってもらえると嬉しいですね。そんな作品を作りたいと思っていましたから。また、『図書館戦争』は、ハードな面もキュートな面も全部一口に食べられる、エンターテインメントの美味しさが詰まった作品になったと思っていますので、この世界を体感して、楽しんでいただければ嬉しいですね。

図書館mini戦争 『図書館戦争』のアナザーストーリー

監督・脚本：佐藤信介　音楽：高見 優(映画「図書館戦争」オリジナル サウンドトラックより)　Special Thanks to 有川浩「図書館戦争」
企画・制作：Angle Pictures　製作："Library Wars" Movie Project　©"Library Wars" Movie Project / Angle Pictures

佐藤監督自らによる脚本・監督のアナザーストーリーとして『図書館mini戦争』が誕生。これは、監督が学生時代から活動している映像製作レーベル"Angle Pictures(アングル・ピクチャーズ)"の創作の一つとして取り組んだプロジェクトで、図書館内での"日常の小さな戦争"を描くもの。Angle Pictures内特設サイト(http://toshokan-mini.anglepic.com)にて公開されている。

「僕は普段、映画制作のかたわらで、自主的に、短いサイレント映画なども作っていました。サイレント映画というのは、映像と、セリフの文字で綴られる、最小の映画です。今回、『図書館戦争』の舞台となった図書館で、この小さな作品を作りました。映像と、文字で綴られる小さな"読む"映画で、『図書館戦争』のピュアな空気を味わってください」(佐藤監督)

Hiro Arikawa
有川浩

撮影：ホンゴユウジ

高知県生まれ。第10回電撃小説大賞「塩の街 wish on my precious」で2004年デビュー。2作目の「空の中」が絶賛を浴び、「図書館戦争」シリーズでブレイク。雑誌「ダ・ヴィンチ」（11年1月号）の好きな恋愛小説ランキングでは「ストーリー・セラー」が1位を獲得。「キケン」が第1回山田風太郎賞の最終候補作品となる。また「シアター!」を原作とした舞台「もう一つのシアター!」では初めて脚本を執筆した。13年には最新作の「空飛ぶ広報室」が第148回の直木賞候補にもなる。今、もっとも面白い“物語”を生み出すクリエイター。

【「図書館戦争」シリーズ以外の主な著作】
「塩の街 wish on my precious」（04）、「空の中」（04）、「海の底」（05）、「クジラの彼」（07）、「阪急電車」（08）、「ラブコメ今昔」（08）、「三匹のおっさん」（09）、「植物図鑑」（09）、「フリーター、家を買う。」（09）、「シアター!」（09）、「キケン」（10）、「ストーリー・セラー」（10）、「シアター!2」（11）、「県庁おもてなし課」（11）、「ヒア・カムズ・ザ・サン」（11）、「三匹のおっさん ふたたび」（12）、「空飛ぶ広報室」（12）、「旅猫リポート」（12）など。

Library Wars Series
「図書館戦争」シリーズ

■小説 <シリーズ累計発行部数350万部超!>

「図書館戦争」
（06／角川文庫）

「図書館内乱」
（06／角川文庫）

「図書館危機」
（07／角川文庫）

「図書館革命」
（07／角川文庫）

「別冊 図書館戦争I」
（08／角川文庫）

「別冊 図書館戦争II」
（08／角川文庫）

「レインツリーの国」
（06／新潮社）
「図書館内乱」に出てくる
本を実際に小説化

■漫画

「図書館戦争 LOVE&WAR」
（07～LaLaにて連載中／白泉社）
11巻まで発売中／漫画：弓きいろ

■アニメ

テレビ「図書館戦争」
（08／アスミック）
Blu-ray BOX／DVD 全5巻

映画『図書館戦争 革命のつばさ』
（12／角川書店）
Blu-ray／DVD

テレビ：©有川浩／アスキー・メディアワークス／図書館戦争製作委員会
映画：©有川浩・角川書店／図書館戦争フィルムパートナーズ 2012

――最初に実写映画化の提案がきたときは、どう思われましたか？

映像化の話がきた時点で、「あ、不可能なものにきちゃった」と思いました（笑）。たとえば「海の底」（05）は、かなりお金がかかるだろうけどやろうと思えばやれるな、という枠なんですけど、自分の中では「図書館戦争」は絶対に無理だろう、という枠だったんですよ（笑）。これだけ無茶苦茶な設定で引き込むのは小説だからできる荒業で、映画の2時間という制約の中でお客さんを引き込むことが可能とは思えなかった。でも、最初に辻本（珠子）プロデューサーにお会いしたら、ものすごくプラス方向のマインドを持ってらっしゃる方で。この方ならお任せしても大丈夫そうだという感触を得られたんですけど、一つハードルを上げさせていただいて、脚本で判断させてほしいと申し上げたんです。その後、初稿をあげていただいたときに、「もう何も言うことはないです、進めてください」とお伝えしました。そこには『GANTZ』を手がけられた佐藤信介監督に対する信頼感もありましたし、野木（亜紀子）さんという豪腕な方の脚本を得て、これを佐藤監督がやるなら、間違ったものになることは絶対にないだろう、と、始まる前から確信がありましたね。

――佐藤監督とは以前からお知り合いだったのですか？

映画の話が本格的に始動する前に一度偶然お会いしていて。その後メールをいただいたんですけど、「どんな荒唐無稽なお話でも、その中でリアルを成立させることができると僕は信じて撮っているんです」とありました。フィクションに対する理念の部分が似てるな、と思ったんです。私も、どんな荒唐無稽な話でも、そこに生きている人間にウソがなければ、絶対に成立させることができると思っているので。私は、映像化というのは、この人たちとだったら心中しても構わないという人じゃないと預けないんですけど、このチームならおそらく心中さえしないだろうと（笑）。

――稲嶺のキャラクターについて、最初にリクエストを出されたそうですね。

「稲嶺は出さないでください」と申し上げたんです。本当に無茶な提案だと思うんですよ。図書隊の根幹を作った人間ですし、原作でも人気が高いキャラクターですし。でも「わかりました」と辻本さんに即答していただいて。だけど着地点が、なかなか難しかったので、私が「いっそのこと、稲嶺は日野の悪夢で死んだことにしましょうよ」と言いました。さすがにその判断は他の方にはできなかったんですよね。でも映像になるという時点で、すでにもう一つの『図書館戦争』ですから。そこの世界では稲嶺はもしかしたら、本を守って死んだかもしれない、と。全然アリだなと思って。

――稲嶺は児玉清さんがモデルだとか。

書き始めたときに、信念のある年配の男性で、読書家で、カッコよくて、素敵で……と考えたら、私の中では児玉清さんしかいなかった。私はキャラクターにモデルをほとんどたてないんです。ほかには、「図書館戦争」の本の装丁の際、柴崎のイラストヴィジュアルを栗山千明さんのようにしてほしいとオーダーしたことがあるぐらいで。柴崎のルックスに関しては、完全に栗山さんをイメージしていましたね。

――堂上と郁を演じる岡田准一さんと榮倉奈々さんは、「ダ・ヴィンチ」の仮想キャスティング投票で1位のコンビですが、そのキャスティングをどう思われましたか？

「この二人以外いないと思うんです」とプロデューサーが来られて、原作の読者を最大限尊重する決意でいてくださっているんだなと思いました。完成した映画を見ても、本当に堂上と郁ですよね。私は小説の世界であの二人を書きましたけど、このフィルムの中の世界には、本当に良化法が存在し、郁や堂上がいる。そのことにものすごく感動しました。それは皆さんが堂上と郁のいる世界を本気で信じて作っているから。岡田さんと榮倉さんにも感謝ですね。ファンの方に怒られそうだからできませんけど、言葉じゃなくて、いっそ抱きしめたいです（笑）。他のキャストの方々も、田中さんは小牧で、福士さんは手塚で、栗山さんは柴崎にしか見えなかったです。

――会話の生き生きした感じは、原作にも通じる気がしましたが、いかがですか？

でも、セリフをいくら書いても、役者さんがそこに気持ちを入れることができなかったら、絶対生き生きとはしないです。たとえば成立するのが難しいセリフとして「ここに乙女がいます、軍曹！」っていうのがあって（笑）。あれは活字だから成立するけど実写では無理だろうと思っていたのに、映画を見たら、「成立してるよ！」って（笑）。それだけ榮倉さんと栗山さんの関係性がすごく良かったんだと思うんです。実際、現場に伺ったとき、休憩時間に榮倉さんと栗山さんが楽しそうに、きゃっきゃっと話してらっしゃって、仲の良い感じがすごくあって。それが、郁と柴崎もこんな感じなんだろうなという雰囲気ですごく良かった。あのいい空気感がフィルムに映し出されているんだろうなと思いましたね。

――石坂浩二さんが演じた仁科については、どんなことを思われましたか？稲嶺の遺志を継いでいるキャラクターですが。

仁科は稲嶺よりも主張が頑ななんですよ。稲嶺をよりどころにしているからこその頑なさ、託されたものを守っているがゆえの頑なさだなと思います。仁科はフィルムがあったからこそ生まれたキャラクターですけど、稲嶺よりも若干の危うさがあるところが素晴らしいと思ったんです。難しいキャラクターを見事に立ててくださったことに感動しましたし、石坂さんがそのキャラクターをきちんと成立させてくださっているところが、さすがだな、と。児玉さんと親交もおありでしたしね。もし今後もシリーズが続くとしたら、ある意味では一番楽しみなキャラクターですね。フィルムの『図書館戦争』はこの人に支えられていくんじゃないかと。石坂さんは、どんな仁科を育ててみせてくださるのか。それが見たいですね。

――原作にはない肉弾戦が、描かれていたことについてはどんな印象を？

私が書かなかったカッコいいところを見せてもらったという感じですね。小説の中では存在しませんでしたが、郁に向かって偉そうぶっている以上、堂上は、あのぐらいのことはできる人であってほしい（笑）。小説では、文章としてカタルシスのある展開にしましたが、映像は別のやり方があるべき。岡田さんを連れてきて、あのラストにいかないのはあり得ない（笑）。あのシーンを作らなかったら逆に説教したかったぐらい（笑）。

――映画をご覧になった率直な感想をお聞かせいただけますか？

号泣しました（笑）。手の内が全部わかっているはずなので、自分のフィルムで号泣することは今までなかったんですけどね。原作を尊重しつつも、全然原作によりかかってない、そういう強さがすごくあるフィルムでした。これはパラレルワールドの、もしかしたら映像作品の『図書館戦争』が先行していた世界から、信介監督が持って来てくださったフィルムじゃないかと。『図書館戦争』の映像が先で、私がノベライズしたという世界もあったかもしれないなというぐらい、どちらも本物の『図書館戦争』です。

――佐藤監督とのお仕事や制作の現場を改めて振り返って思うことは？

スタッフみんな佐藤監督が大好きなんですよ。「もう！しょうがないんだから」ってなんでもやってあげたくなるみたいな（笑）。現場にいつ行っても、みんな楽しそうで、のびのびしている。この空気感を作れるのは人徳だな、愛されている方だなと思ったんです。私も大好きですね。佐藤監督に作ってもらえて本当に良かったと思うし。このキャスト、スタッフで良かった。他の人は考えられない。もし続きをやることになったら、これ以外の編成では受け付けません、みたいな（笑）。続きが見たいですよ。本当、『革命』まで見せてほしい。

脚本 野木亜紀子

――「図書館戦争」との出会いは?

オファーをいただいてすぐ原作を読んだら、ものすごく面白くて。「図書館革命」までを、一気に2周したんですが、2回目でも面白くて、感動して泣きながら読んだほどです。最初に、辻本プロデューサーにお会いしたときに、脚本化にあたってのアイディアをお話ししたら、目指す方向性がほぼ同じだったので、プロット(あらすじ)は抜きで、いきなり初稿を書きました。骨格は完成稿とほぼ同じですが、3時間くらいのボリュームがありました。

――脚本にする際に、心掛けたことは?

原作のマインドを大切にすること。なかでも有川先生の作品は、キャラクターがみんな素晴らしいので、それは絶対に守らなきゃいけないと考えていました。あとは表現規制の問題。今の時代に表現する者として、自分自身、興味のあるテーマだったこともあり、そこはしっかり訴えたいと思いました。完成稿にするまでには、監督、プロデューサーと何十回も打ち合わせをしたんですが、特に戦争シーンのリアリティについては話し合いを重ねました。この作品の中での最初の戦闘(中盤の図書館襲撃)を、どんな始まりでどう描くか、というのは佐藤監督が一番気にしていたところです。

――完成した映画をご覧になって、どのような感想を持たれましたか?

岡田さんは想像以上に堂上としてカッコよく、榮倉さんは想像以上に郁でした。2か所ほろりとしたシーンがあって、一つめは仁科が大切にしていた本が燃やされるところ。ここは映画オリジナルで、初稿のときから燃やすことに決めていました。というのも、本が好きな人なら、冒頭の日野図書館で本が焼かれるシーンで切なくなるはずですが、本に愛着がない人にも、映画が終わる頃には同じ切なさを感じてほしかったんです。日野の悪夢でたった1冊だけ残った大切な本が、目の前で燃やされてしまうと、きっと誰もが切ない気持ちになるんじゃないか。実際、完成した映画でそのシーンを見たら、自分でやっておきながら悲しくなってしまいました。あとはアジトから出てきた後の、堂上と郁の抱擁のシーン。郁そのものとしての榮倉さんに泣かされました。脚本のときには、まさかあそこで泣けるとは思っていなかったので、驚きました。他のキャストの皆さんも、全員ものすごく役にぴったりでしたね。脚本家というのは、書いた後は現場にお任せしてしまうので、実は出来上がりを観るまですごく不安だったりもするんです。でも完成したものを見たら、すべてが想像以上の出来で、嬉しかったです。あと、アクションの長さも想像以上でした(笑)。台本のときから佐藤監督にじわじわ増やされてはいたんですが、本編になってさらにドーンと増えてました(笑)。

――「図書館戦争」の脚本化作業は、野木さんにとってどういう経験でしたか?

いまだに佐藤監督や辻本プロデューサーと「図書館戦争」の話になると、三人とも口を揃えて、「楽しかったよね」って言うんです(笑)。実は本直しってつらい作業なんですよ。でも、今回は関わった人たちみんなが、「図書館戦争」が大好きで、愛を持って取り組めたから、楽しかったのだと思います。それもひとえに原作の魅力のおかげです。この作品に関われて、本当に良かった。光栄です、の一言に尽きますね。

【近年の参加作品】「さよならロビンソンクルーソー」(10)、「ラッキーセブン」(12)、「主に泣いてます」(12)、「空飛ぶ広報室」(13)など。

音楽 髙見 優

――本作では、メインテーマの「Library Wars」を先に制作されたそうですね。

最初の打ち合わせで、サウンドトラックのメインテーマをトレーラー(宣伝用映像)で使いたいという要望を受け、先に1曲を仕上げることになりました。戦争ものであり、人間ドラマであり、ラブの要素もある作品なので、メインテーマをどの方向性で行くかは制作陣と何度もやり取りしましたね。エンドロールで流れることも最初から決まっていたので、台本を読んでラストシーンをイメージしつつ、図書隊全員をくるんであげられるテーマになればという思いで作曲しました。普通、サウンドトラックというとそれぞれのシーンを想定した曲を作って、それを監督やプロデューサーにご提案する形になるんですが、今回はまず、映像を見る前にメインテーマだけをお渡しすることになり、しかもみなさんとは初めてご一緒するので不安もありました。でも、仕上げたものを、北九州で撮影中の監督や辻本プロデューサーのもとにお送りして聴いてもらったら、「涙が出た」とおっしゃってくださり、嬉しかったですし、本編のサウンドトラック制作へ向けて、僕の想定しているものにズレはなさそうだなと安心しました。

――その他の楽曲については?

編集が終わってからレコーディングまであまり期間がなかったので、映像が繋がるより前に作ったものが多いですね。サントラで言うと、初めの3曲はかなり早めの段階で作ったものです。メインテーマの次にポイントとなったのが、ラブをテーマにした「堂上の想い」。これは、台本で堂上と郁のシーンを何度も読んでイメージしました。それから1曲目に入っている「図書隊のテーマ」は、実はメインテーマ候補のひとつでした。この曲は「Library Wars」より、戦いのイメージが強くなっています。

――今回、仕上げ作業をハリウッドで行われたと聞いています。

打ち合わせの時点で、サウンドデザイン(音響効果)をハリウッドのSony Pictures Studiosで行うという話は聞いていて。サウンドのミックス(音量・音質バランスの調整)もLAを拠点に活躍されている音楽エンジニアの宮澤(伸之介)さんにお願いしました。これまでも、ハリウッドサウンドと日本映画のサウンドの違いをなんとなく感じてはいたんですが、LAに行ってわかったのが、スタジオのスピーカーの違い。ハリウッドは日本に比べ、映画館のスピーカーにより近い形でミックスするので、今回は新旧どの映画館で聴いてもらっても、さほど鳴り方に差が出ないサウンドになったと思います。また、LAでは、映画用だけでなく、サントラCD用のミックスも2曲行いました。それがメインテーマと10曲目のバラード「カミツレ」です。他の曲と比べて、奥行きがある仕上がりになっています。

――サントラは聴きごたえがありますね。

いつもサントラCDを作るときは、勢いのある曲で始めて、最後はしっとり終わらせたいと思っているんです。「カミツレ」を最後にしようかとも思ったんですが、今回は2枚組のつもりで構成し、「カミツレ」は1枚目の最後の曲ということにしました。11曲目の「タスクフォース」で第二幕が始まるイメージです。そして、最後の「嵐の夜に」は、メインテーマのピアノバージョンになっています。

【近年の参加作品】『ROOKIES-卒業-』(09)、『任侠ヘルパー』(12)、ドラマ「月の恋人～Moon Lovers～」(10)、「フリーター、家を買う」(10)、「JIN-仁-」(11)など。

■映画「図書館戦争」オリジナル・サウンドトラック

音楽:髙見 優　発売元:Anchor Records　UZCL-2041　¥2,500(税込)／発売中

1. 図書隊のテーマ
2. Library Wars
3. 堂上の想い
4. リペリング
5. ドロップキック
6. はじまりの国のさいごの話
7. 五年前
8. UH-60
9. 小田原の戦い
10. カミツレ
11. タスクフォース
12. ランチタイム
13. ヒトキュウマルマル
14. 緊急伝達
15. 仁科の願い
16. ブラックストーン
17. エムナイン
18. 火炎放射器
19. ナイフを持つ男
20. 本を焼く国
21. 優しい手
22. 嵐の夜に

辻本珠子 プロデューサー

映画完成の朝、電車の向かいの席に座った女の子が「図書館戦争」を無我夢中で読んでいた。その姿が、数年前の自分の姿と重なる。——いつか、自分が観たい映画を作れるかも。好きなものを好きと言える自由があるから。そんな願いを叶えてもらった、私の大好きな映画です。ご覧になった方に気に入っていただければ、本当に、嬉しいです。

【近年の参加作品】『余命1ヶ月の花嫁』(09)、『ダーリンは外国人』(10)、『ハナミズキ』(10)、『アントキノイノチ』(11)、『ガール』(12)、『麒麟の翼～劇場版・新参者～』(12)、『のぼうの城』(12)など。

河津太郎 撮影監督

郁と堂上のコミカルなやり取りからシリアスな描写。さらにやりすぎなくらいの戦闘場面をどのようなトーンで構成して一本の作品にしていくかが今回の課題でした。レンズやライティングでさりげなく違いをつけて工夫をしています。過酷でしたが楽しい撮影でした。小田原戦を撮り終えた瞬間みんなで万歳したのは忘れられません。

【近年の参加作品】『LOVE SONG』(01)、『隣人13号』(05)、『日本沈没』(06)、『砂時計』(08)、『GANTZ』(11)、『ガール』(12)。その他、椎名林檎「百色眼鏡」、Mr.Children「くるみ」、山下達郎「FOREVER MINE」、CFなど。

Steven Ticknor サウンドデザインスーパーバイザー

“図書館で起きる戦争”ということが、非常に他の作品と違いますよね。サウンドデザインについては、目の前のことが現実に起きているかのように見せること。そして、図書隊側と良化隊側、守る側と奪う側を区別できるように（特に銃声には）気をつけました。今回の仕事は、素晴らしい機会だったと思います。

【近年の参加作品】『スパイダーマン』(02)、『ターミネーター3』(03)、『カンフーハッスル』(04)、『トータル・リコール』(12)など。

田口良子 スクリプター

佐藤組は終わらないのではないかという感覚がいつもついてきます。仕事量は半端なく、七転八倒の日々を強いられます。しかし、そんな苦労をも忘れさせてくれるクオリティの高い作品を佐藤監督は作り上げてくださいました。この感動が多くの方に伝わりますよう心から願います。

【近年の参加作品】『GANTZ』(11)、『GANTZ PERFECT ANSWER』(11)、『キツツキと雨』(12)、『桐島、部活やめるってよ』(12)、『横道世之介』(13)、『夏の終り』(13)など。

神谷 誠 VFXスーパーバイザー

派手なVFXを見せ場とする作品ではないので、VFXだと悟られないように、なるべく作品世界に馴染むように、ということを心掛けました。実際には200カット以上のVFXショットが使われているのですが……。

【近年の参加作品】『日本沈没』(06)、『真・女立喰師列伝』(07)、『L change the WorLd』(08)、『バイオハザード ディジェネレーション』(08)、『彼岸島』(10)、『GANTZ』(11)、『GANTZ PERFECT ANSWER』(11)、『バイオハザード ダムネーション』(12)など。

関山和昭 操演

『図書館戦争』で我々操演部が最も苦労したのは、冒頭の火炎放射器でした。監督は「本物と同じ火炎放射器がいいですネ」と、今回もニッコリ物腰柔らかに無茶な要求をぶつけてきました。さすがに本物同様に40mも火炎を放射することは不可能です。何とか15m程でOKをもらいました。苦労した甲斐があり、大変迫力のあるシーンになっていたと思います。

【近年の参加作品】『聯合艦隊司令長官 山本五十六』(11)、『巨神兵東京に現わる』(12)、『のぼうの城』(12)、『脳男』(13)など。

高瀬大樹 制作担当

実写化に際し小説・アニメと多くのファンがいる中で、武蔵野第一図書館をイメージを壊さず、鑑賞後行ってみたくなるような図書館で撮影したいなと一番に考えました。各関係者の方々のご尽力で素晴らしいロケーションで撮影させていただけました。皆様ご協力ありがとうございました。

【近年の参加作品】『外事警察』(11／制作主任)、『桐島、部活やめるってよ』(11／制作主任)、『はやぶさ HAYABUSA』(11)、『くちづけ』(12)など。

志田博英 音楽プロデューサー

「戦争」×「ラブコメ」。「何のために戦うのか?」その意味を見いだす＜音楽＞が必要だと思いました。高見さんとなら、勇壮なサウンドの中に、繊細な旋律を加えることで、監督が描く＜誰も観たことのない＞世界観の手助けをできるのではないか。テーマ曲「Library Wars」が、まさにその思いの答えになった、と確信しています。＜誰も聞いたことのない＞世界観にも注目していただきたいです。

【近年の参加作品】『カイジ 人生逆転ゲーム』(09)、『カイジ2～人生奪回ゲーム～』(11)、『麒麟の翼～劇場版・新参者～』(12)、『ホタルノヒカリ』(12)など。

横野一氏工 録音

自分と佐藤監督とは今回で4作品目になり、前作の『GANTZ』よりさらにパワーアップした監督の技量で、銃撃、爆破、アクションの戦闘シーンに対する究極なリアルな追究撮影は最高だったなー。もちろん、恋の話もちりばめて。

【近年の参加作品】『助太刀屋助六』(02)、『ロッカーズ ROCKERS』(03)、『NANA』(05)、『GANTZ』(11)、『カイジ2～人生奪回ゲーム～』(11)など。

松田光畝 装飾

今回『図書館戦争』という作品をやらせていただくにあたり、軍事もの作品は初めてでしたので、いろいろな意味で良い勉強になりました。思い出と言えば2000個の土嚢をスタッフ、キャストのみんなが手伝って運んでくれたことでしょうか。本当にありがとうございました。

【近年の参加作品】『パッチギ!』(05)、『ぐるりのこと』(08)、『白夜行』(11)、『ひみつのアッコちゃん』(12)など。

今井 剛 編集

「図書館」と「戦争」という混じり合いそうもないけど興味をそそるタイトル、「平成」ではなく「正化」だったらという離れすぎないパラレル設定、「戦争」というリアルと「恋愛」というスイートな映像、何かと相対する題材を一つの作品に編集するのは大変でしたが、素敵な作品になったと思います。

【近年の参加作品】『GANTZ』(11)、『GANTZ PERFECT ANSWER』(11)、『悪人』(11)、『るろうに剣心』(12)、『つやのよる』(13)、『プラチナデータ』(13)など。

中野創平 ガファー

いつも撮影に入るにあたり、自分で心掛けていることがあります、それは準備を怠らないことです。今回は特にスケジュールが厳しい作品でしたので、いろいろな状況を考慮して、それに対処できる状態を目指しました。結果、それに応えるように照明助手のみんなが素晴らしい仕事をしてくれて、本当に感謝しています。

【近年の参加作品】『隣人13号』(05)、『日本沈没』(06)、『砂時計』(08)、『GANTZ』(11)、『ガール』(12)など。

納富貴久男 ガンエフェクト

図書館限定の戦闘といってもやはり戦争映画です。登場する銃器の数もさることながら、発砲数や弾着も相当な分量になるので、クオリティ維持して揃えるのには悩まされました。それから何と言っても、稼働中の図書館や美術館内での銃撃戦がロケ地の協力で実現できたため迫力を出せたと思います。

【近年の参加作品】『のぼうの城』(12)、『アウトレイジ・ビヨンド』(12)、『悪の教典』(12)、『脳男』(13)、『リアル～完全なる首長竜の日～』(13)など。

田口生己 ラインプロデューサー

準備段階より監督のこだわりでもあった、“リアルな市街地での戦闘シーン”。実際に北九州市でロケを行いました。市民の皆様の多大なご協力もあり、ロケ撮影でしか出せないリアリティある迫力の戦闘シーンを撮ることができました。今作の大きな見所の一つになったと思います。

【近年の参加作品】『毎日かあさん』(11)、『モテキ』(11)、『ツナグ』(12)など。

PRODUCTION NOTES
プロダクションノート

図書館戦争を映画にする

2011年「図書館戦争」シリーズが文庫化された直後から企画がスタート。読むたびに違う想いが湧き上がり、何度も繰り返し同じ図書を読みたいと思わせる内容やキャラクター、メッセージ性の多様性が魅力、と辻本珠子プロデューサーは原作に惹かれた理由を語る。
原作者・有川浩先生は、図書館で“図書館の自由に関する宣言”を見て、それをきっかけに「図書館戦争」を生みだした。他では決して味わえないこの世界を映画化できることに魅力を感じた佐藤信介監督が演出を務めることに。本を守るという、特別な使命を持った“図書隊”の過酷なバトルがある一方で、コミカルで瑞々しいラブストーリーでもあることに興味を覚えたと言う。

有川先生は、不可能だと思っていたと言いつつも実写映画化を快諾。ただし一つだけ条件があった。図書隊の祖・稲嶺司令は、亡くなられた児玉清さん以外考えられない、と。その気持ちを汲みつつ、映画ならではのキャラを作り込める喜びもあり、脚本の野木亜紀子を交えた打ち合わせの末、仁科基地司令という人物に登場してもらうことになった。演じるのは、児玉さんとも親交のあった石坂浩二さんということもあり、映画『図書館戦争』ワールドの中心人物となる。

日本全国を対象にして撮影可能な図書館探しが始まる。関東図書基地のイメージだけでなく、図書隊の制服も色や形から決めなくてはならない。実在しない“図書隊”を描くことは、すべてを一から決めていくということ。佐藤監督の緻密な設計力と創造力が発揮されていく。
アクション部スタッフによるビデオコンテや、膨大な画コンテを基にした、撮影現場のシミュレーションには何十時間と費やされた。

本を読む自由とともに思想を守る、という図書隊の理念が、防衛省の理解を得られ、陸上自衛隊と航空自衛隊の撮影協力が決定。ヘリやトラックの出動だけでなく、基地内での撮影においても協力を得られることになった。また、日々の訓練や隊員達の生活も参考にさせていただき、図書隊の基盤となった。

多くのスタッフによる数ヶ月の準備を経て、迎えた2012年秋。いよいよ撮入となる。

図書館戦争を撮る

◆クランクイン◆

2012年9月29日、佐藤組クランクイン。
映画のオープニングで『図書館戦争』の時代背景を説明するために、書店での検閲シーンや未来の情報番組での討論の様子などがふんだんにコラージュされる。それらのシーンから撮影がスタート。佐藤監督はiPad片手に出演者たちに「表現の自由」や「検閲」に関する質問をアドリブで投げかけ、自由な意見を引き出していた。

10月5日。石坂浩二さん、西田尚美さん、橋本じゅんさんクランクイン。
西田さん演じる折口の名前は、有川先生が民俗学者の折口信夫からいただいたとのこと。そして石坂さんは折口信夫全集をお持ちだそう!
岡田准一さんと榮倉奈々さんのクランクインは、その翌日、二人の出会いとなった書店にて。榮倉さんは女子高生姿! 堂上教官は本編中唯一の制帽着用。この制帽のつばのそり具合には監督のこだわりがすごく詰まっているんだそう。

◆撮影、毎日続く◆

図書館内の警備中に、郁が堂上にバインダーで叩かれるシーンの撮影は10月8日。「パーン!」とイイ音が鳴って痛そうだったが、榮倉さんは何回叩かれても「大丈夫です」と笑顔で答えていた。しかしその後に堂上教官からビンタをくらったシーンでは、さすがに痛さと驚きで涙が……。撮影前、岡田さんは「女性は叩きたくないんですが台本にあるので……」と恐縮しきり。そしてカットがかかった瞬間、心配から榮倉さんのもとへダッシュ。普段はまったく鬼教官ではない岡田さん。

この頃、有川浩先生が現場訪問。先生のご出身の高知県の県産品である“ごっくん馬路村”というゆずジュースの差し入れをしてくださる。

現場の装飾品に興味津々で「これは作り物？　触っても大丈夫かしら？」といろいろ見て回り、作り物のパンフレットなどを見て感心されていた。

10月13日、茨城笠間県民の森で行われた山岳訓練の撮影では、直径約2mの大きなファン（扇風機）を用意し、大量の水を使った雨降らしをして擬似ハリケーンを作り出した。あまりの強風と豪雨に岡田さんと榮倉さんはずぶ濡れ。手の感覚がなくなっても撮影は続く。もしや佐藤組の撮影は、図書隊の訓練よりも厳しいかもしれない……。

一方、テントの中のシーン。小さなテントの中で暖かな照明に灯された堂上と郁が急接近！　撮影スタッフでさえもちょっと照れてしまうような胸キュンシーンになった。

◆空自基地で撮影する◆

10月後半、航空自衛隊の入間基地・熊谷基地で撮影が行われた。

入間基地はとても広大でスタッフの移動にも車が使われた。射撃訓練のシーンでは64式小銃に窒素を注入して撮影。銃を撃つ発砲音は毎回大きく響いて耳を塞がなければならないほど。

劇中に登場するトラックやジープは、基地にある車両に図書隊のエンブレムを付けさせてもらったもの。およそ20台ものトラックがキレイに整列している風景は、規律正しい図書隊の姿勢を表現しているかのよう。

一方、熊谷基地で最初に撮影されたのは朝礼のシーン。13mもの巨大クレーンを使用しての大掛かりな撮影になった。撮影前に岡田さんが「今日は郁のしごきがあるので楽しんでしごきたいと思います」と笑顔を見せたグラウンドでの訓練シーンでは、新人隊員がハイポート（小銃を抱えた持久走）と屈み跳躍に挑戦。跳躍のシーンは実際に堂上教官の掛け声に合わせて郁たちが動いたのだが、岡田さんのアドリブで「1、2、3、3、3、4、5……」といったように跳躍の回数が増やされる。あまりの鬼教官っぷりにスタッフ一同苦笑いしてしまう場面も。そんな中、ほふく前進がうまくできない郁のヘルメットを堂上が叩く場面では、カットがかかった後に「痛くなかったですか？」と岡田さんが榮倉さんを心配する場面もあり、やはり本当は優しいツンデレ鬼教官。

仁科司令室の現場になったのは、なんと実際の熊谷基地司令の執務室。図書隊旗を置き、少しの飾り替えをして、ほぼそのまま使わせてもらっている。この部屋には、元・日野図書館長である稲嶺（児玉清さんによる写真出演）と仁科の若き日の写真が飾られる。その横にある花は、カミツレ（カモミール）。花言葉は「苦難の中の力」。図書隊のシンボルとなっている花だ。

柔道場のシーンも熊谷基地内で撮影。空き時間には岡田さんが福士蒼汰さんに格闘技の技を教え、福士さんも楽しそうに蹴り技を習う微笑ましい場面も。

郁と柴崎の部屋も熊谷基地隊舎の一室。隊舎の3人部屋をお借りし、立て壁を入れて（広すぎるため）2人部屋に作り替えた。柴崎が使用している乳液はメイク部が用意した1本7500円もする超高級乳液！

榮倉さんはそのシーンで食べていたケーキを撮影後、幸せそうに持って帰っていった。榮倉さんと栗山千明さんは共演初日から仲良く話していて、その様子はもうすでに郁と柴崎のよう。ちなみに郁と柴崎がお気に入りの、ミルフィーユカツが美味しいレストラン「トランザール」。実はこの名前は実在する輸送機（C-160 トランザール）の名前からつけられている。

撮影終了後、毎度スタッフは、お土産屋に自衛隊グッズを買いに走っていた。

◆数々の図書館で撮影◆

本作に出てくる図書館は、スタジオセット（＝映画のために作り上げた世界）のようにも見えるが、実はすべてロケ。実在する図書館をお借りして撮影している。もしセットであれば、館内にある何十万もの種類の図書を集めることはできなかっただろう。

11月2日、日野図書館のシーンを旧・山梨県立図書館で撮影。ここは12年6月に閉館し、新設された図書館へお引越し作業中。美術部が約5万冊の本を運び込んでの撮影となった。床や階段のカーペットも張り替えて見事に復活。地元のフィルムコミッションの方は「閉館前よりもきれいになったかも」と語っていたほど。

武蔵野第一図書館・関東図書基地の外観に起用されたのは北九州市立中央図書館だ。劇中、小田原の情報歴史図書館として使われた北九州市立美術館とともに、有名建築家の磯崎新さんによる建築物。北九州市立中央図書館は通常運営しているため、休館日以外は閉館後から準備を開始し、撮影が行われた。開架閲覧室の他にロビー・廊下・会議室、館外でも門前・階段・駐車場・中庭と様々な場所がロケ現場として撮影された。

武蔵野第一図書館内のメインとなったのは、新潟・十日町情報館。ここでは11月5日に、映画のラストシーンが撮影された。堂上のラストカットの表情は岡田さんが監督と何通りも表情の確認をして決めていく。その王子様の表情は女子スタッフからは「（ハードな撮影の）全ての苦労が報われる」とばかりにため息がもれ、モニターを見ていた監督さえも胸キュン

してしまうほどの素敵なシーンに。監督だけではなく、全スタッフこだわりのラストシーンに仕上がった。
この3か所以外に、開館前の現・山梨県立図書館、茨城の水戸市立西部図書館でも撮影が行われている。どの図書館もそれぞれ建築物としても非常に個性的で、スクリーンではその特徴が活かされている。

◆クライマックスシーンの撮影◆

11月6日より数日間にわたり、撮影が行われたのは茨城県にある元ショッピングモール。良化隊に賛同する団体のアジトのシーンで、検閲本を乱雑に捨てている設定のため、床一面に本が敷き詰められ異様な雰囲気が漂う。持ち込んだ約4万冊の本を汚し、破り、散らかして飾り込む。映画の撮影とはいえ、なんとも胸が痛くなる現場だ。こんなことが現実になってしまったら本当に恐ろしいことだと思う。撮影隊は大量に敷き詰められている本の、わずかな隙間を歩いていた。
「本を焼く国は、いずれ人を焼く」。映画の中に出てくる台詞が沁みる現場だった。

メディア良化法の賛同団体のリーダー・武山を演じるのは鈴木一真さん。武山は手にミサンガをしているのだが、実はそのミサンガは鈴木さんの奥さまの手作り！　監督から、何か特徴的なアクセサリーをつけたいと相談され鈴木さんが提案してくださったのが、このミサンガだった。映画では仁科がそのミサンガを見て「あの時と同じ……」とかつて日野の悪夢で同じ者に襲われたことを思い出すことにつながっていく。小物ひとつで物語も作られる。
この頃、監督の手にはiPadではなく、代わりにiPad miniが。さすがIT監督、最先端。

◆北九州での撮影◆

11月12日から北九州での撮影がスタート。ここからは戦闘シーンの撮影が続く。11月17日。この日の撮影終了は深夜2時（＝18日になっている）。本日撮影終了の掛け声とともに32歳の誕生日を迎えたての岡田さんに、サプライズで大きな図書隊ケーキをプレゼント！　その他に、監督・有川先生・スタッフからもプレゼントが贈られた。榮倉さん・福士さんはじめ、大勢のタスクフォースの仲間に祝われ、すこし恥ずかしそうにしながらも、はにかみながら嬉しそうに感謝の言葉を言う岡田さんでした。

11月19日、北九州市立中央図書館でのロケ。岡田さんは榮倉さんより先に撮影が終了。二人が揃う最後の撮影だったため、この日のロケが終了するまで、現場で見学をしながら待っていた岡田さん。どこまでも律儀な岡田さんに、榮倉さんも感激していた。

11月20日、小田原の情報歴史図書館に見立てた北九州市立美術館での9日間にわたる撮影がスタート。図書隊対良化隊の戦闘がさらに激化していく。
タスクフォース隊員が持っていた「お守り」は、実は本当に出演者のお母さまが手作りしてくれたもの！　当初スタッフが作ったお守りを使用する予定だったが、そのお守りがあまりにも素敵なものだったため、即採用となった。その分、思い入れも強く緊張感が漂う撮影になった。
美術館前の現場に設置された土嚢は約5000個！　ボランティアスタッフの方々に手伝ってもらい、土を詰めて、キレイに重ねて塹壕が作られた。そこはまさに戦場の風景。撮影期間中、一番発砲が多かった日には、数百発も使用しており、日本映画としては稀にみる数となった。
ヘリによる空撮も行われた。全敷地が映るのでスタッフは全員、建物下に隠れて空撮を見守る。上空から映る車は小倉駐屯地から持ち込まれた13台もの自衛隊車輌。協力いただいた自衛官の方から「ほんのわずかなカットなのに、何回も何回も苦労して撮っているのを見て、我々も全力で支援したいと思った」と力強いコメントをいただいた。

スタッフ、キャストが一致団結した有意義な時間もあった。大量に用意された土嚢を美術館内に運ぶ作業を、当初は美術スタッフだけで行う予定だったのだが、皆で運べば早く終わる、とばかりに、岡田さん・田中圭さん・タスクフォースメンバー・良化隊員までをも含めた全キャストとスタッフで行うことに。運んだ数、2000個！　初冬の寒空の下、全員キラキラの汗をぬぐったのだった。

◆クランクアップ◆

11月末。超激戦のシーンを終え、ここで岡田さんがオールアップ！「撮影現場で32歳を迎えられて幸せです。佐藤監督が素晴らしい作品に仕上げてくれると思いますので、楽しみにしています。スタッフのみなさんは、見ていてとてもかっこよかったです。またお会いしたときはよろしくお願いします!」ととびきりの笑顔で挨拶をしてくれた。そしてスタッフ一人一人に声を掛けてから現場を後に。その後続けて田中さんもオールアップ！
堂上＆小牧、バディ揃ってのアップとなった。
その2日後、佐賀県・目達原駐屯地での撮影では、スタッフ全員、事前に「安全の為のブリーフィング」を受けてからヘリ格納庫での撮影を開始。この日、榮倉さんがオールアップ！「女の子のドキドキと男の子のワクワクが詰まった作品になると思います」とコメント。そのまま現場に残り撮影風景を見学していた。帰り際、メガホンを持ちスタッフに「笠原、お先に帰りまーす!!」と満面の笑顔で挨拶。スタッフも大きい声で「お疲れ様ー!!」と皆が手を振ってお別れをする。そして12月5日。佐藤組最後の撮影は東宝スタジオでの、銃器の火花、破片などの素材撮り。ラストカットとなった合成用の煙素材は、スタッフから「せっかくだから」と勧められ、監督とスクリプター田口良子さんとのコンビが発砲！　監督は発砲している間、終始笑顔。そして日付も変わりかけた深夜、佐藤組ついにオールアップ！
撮影57日目。長くハードな撮影が終わった。監督は、銃をiPad miniに持ち替え、夜中でも元気。本当にタフである。

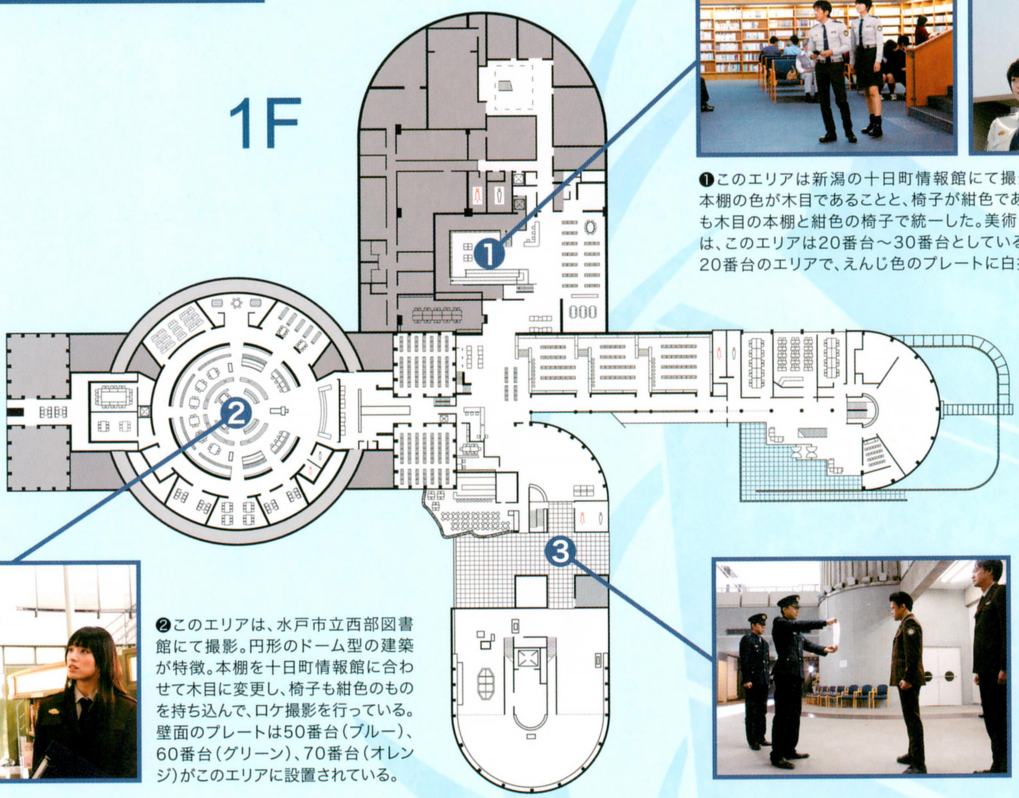
図書館戦争ができ上がる

2012年の末、クランクアップから数日も空けずに編集作業が始まった。現場では多いときには3台のキャメラで撮影を行ったため、膨大な素材の量となっていた。
同時にCG作業と音楽作りもスタート。高見優によるメインテーマ「Library Wars」は、撮影途中に作曲・制作されたもので、高見が監督と話し自らの想像力を最大限に発揮した“図書隊のイメージ曲”である。メインテーマが映画完成よりも前にでき上がるのは日本映画では稀。勇壮で爽やかなマーチの音楽を、スタッフが撮影中に聴くことができたことは、この映画の大きな支えとなった。
そして監督のこだわりは効果音でも表される。担当したのは、アメリカ・ロサンゼルスにあるSony Pictures Studiosのサウンドデザイナーたち。普段はハリウッド大作を手がけているスタッフだ。チーフデザイナーのSteven Ticknorの代表作は『スパイダーマン』(02)、『ターミネーター3』(03)、『カンフーハッスル』(04)、『トータル・リコール』(12)など。彼らたちの手による効果音は、平面のスクリーンに大きな奥行きを与えている。

文：廣宮彩未（製作宣伝）

PRODUCTION DESIGN
美術

武蔵野第一図書館

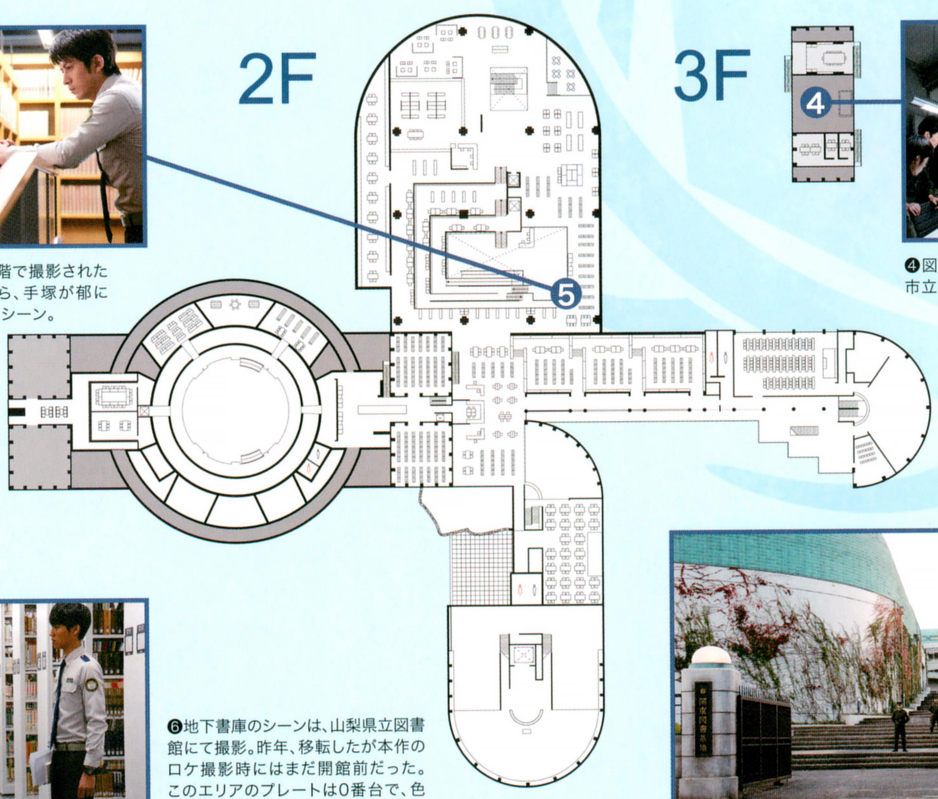


❶このエリアは新潟の十日町情報館にて撮影。十日町情報館の特徴は、本棚の色が木目であることと、椅子が紺色であること。そのため、他のエリアも木目の本棚と紺色の椅子で統一した。美術部が設置した壁面のプレートは、このエリアは20番台～30番台としている。スクリーンに映るのは主に20番台のエリアで、えんじ色のプレートに白抜きの数字が目立つ。

❷このエリアは、水戸市立西部図書館にて撮影。円形のドーム型の建築が特徴。本棚を十日町情報館に合わせて木目に変更し、椅子も紺色のものを持ち込んで、ロケ撮影を行っている。壁面のプレートは50番台（ブルー）、60番台（グリーン）、70番台（オレンジ）がこのエリアに設置されている。

❸このエリアは、北九州市立中央図書館にて撮影。磯崎新の設計した建物で、アーチ型の天井が特徴的。良化隊長の検閲執行宣言と、それに対する図書特殊部隊長の答申が行われるシーンなどを撮影している。

❺十日町情報館の2階で撮影されたのは、堂上が柴崎から、手塚が郁に告白したと知らされるシーン。



❹図書基地の会議室のシーンは、北九州市立中央図書館にて撮影。

❻地下書庫のシーンは、山梨県立図書館にて撮影。昨年、移転したが本作のロケ撮影時にはまだ開館前だった。このエリアのプレートは0番台で、色はターコイズブルー。

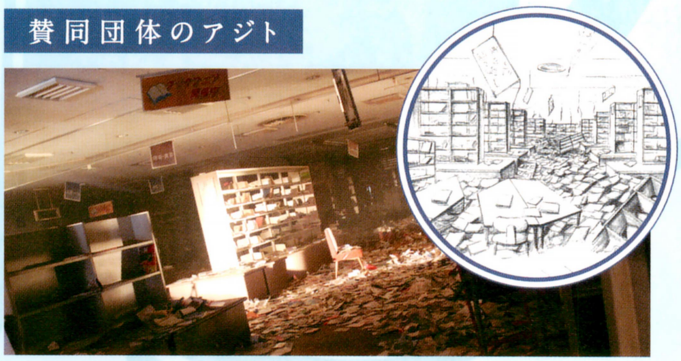
日野図書館

移転前の旧・山梨県立図書館を利用。ロケ撮影時には、所蔵本が現・山梨県立図書館に移動していたため、美術部が約5万冊の本（落丁・乱丁本）を運び込んで撮影。ガスマスク姿の男性たちが発砲するシーンは、本棚の中に弾着を仕込んで爆発させている。一方、火炎放射器が火を噴くシーンは御殿場に図書館のセットを組み、実際に火を使って撮影したカットを本編に合成した。旧・山梨県立図書館からは処分が決まっていた本棚をいただき、本編のあちこちで使用している。

小田原・情報歴史図書館

北九州市立美術館にて撮影。土嚢をスタッフ、キャストみんなで運んだのはここ。用意した約5000個のうち、2000個の土嚢を表から建物内に運び込んだり、逆に中から外に運び出したりと、大移動させた。また、日野図書館のシーンで使った本棚がここにも持ち込まれている。

賛同団体のアジト



茨城県の水海道にある元ショッピングモールでロケーション撮影。本に関連する場所にしたいということで、元・本屋という設定にしたが、実際に飾りつけるのは至難の業だった。本棚を旧・山梨県立図書館より持ち込み、白っぽく塗り直し、約4万冊の本を運び込み、のべ2週間かけて敷き詰めている。また、全体的にかなりの汚しを施している。敷き詰めた本を踏み歩けず、スタッフが続々と腰痛になった。

――本作の美術はどこから取りかかられましたか？

図書館の話ですから、図書館をどう見せるかまず考えました。セットで作ると大変なことになるんですが、かといって、何か所かのロケーション撮影でやるとすると、ちゃんと一か所に見えるのか不安もありました。それに、戦いのシーンがありますから、使わせてもらえる場所がなかなかない。図書館というのは一番アクションと無縁な場所なので、かなりの協力が得られないとロケ撮影が難しいんです。

――そんな中でいくつかの図書館が見つかったんですね。

日野の悪夢の撮影をした旧・山梨県立図書館は、フィルムコミッションの協力があって撮影が実現しました。あとは北九州で、武蔵野第一図書館の一部と小田原の情報歴史図書館のシーンをロケーション撮影できたのは大きかったですね。武蔵野第一図書館については、最初は2か所のロケーションを繋げれば撮影できると思ったんですが、監督とカメラマンの河津さんが画的にどうしても3か所でやりたいとおっしゃって。地下書庫も入れると4か所で撮影することになったので、画の繋がり的にも、スケジュール的にも不安でしたが、完成した映画を見たら、全然違和感なく繋がっていて良かったと思いました。

――1つの場所に見せるための工夫は？

十日町情報館も水戸市立西部図書館も、そして北九州市立中央図書館も偶然コンクリートの壁だったのは良かったですね。書棚は、芝居部分を多く撮影した十日町情報館が木目だったので、それを軸にして水戸市立西部図書館と北九州市立中央図書館も木目に飾り替えました。椅子は十日町情報館にあったブルーのものに合わせて、他の図書館にもブルーの椅子を並べて。あとは、壁面のプレートですね。「文学」「科学」というような分類は隠して、数字が目立つようにしました。そうやって強調すると全体的に統一感が取れますし、無機質な印象も出ますから。数字は白抜きにして、プレートの色は10番ごとに替えました。たとえば、20番台はえんじ色で、50番台がブルーというように。図書の分類は、未来の設定なので、現在より本が増えているだろうということで、桁を多くしました。

――今回もっとも苦労した点は？

とにかく数が必要なものが多かったことです。アジトでは約4万冊の本を敷き詰めて本当に嫌になりました（笑）。そして、その後は北九州で土嚢運び（笑）。これは、皆さんに手伝っていただき、申し訳なかったですが、良く言えば結束が深まったのかなと。今回の作品は、とにかく大変でしたけど、完成した映画を見て本当にやって良かったと思いました。それは何事にも代えがたい喜びですね。

デザイン画：斎藤岩男

美術 斎藤岩男

近年の参加作品：
『砂時計』（08）、『山形スクリーム』（09）、『インシテミル　7日間のデス・ゲーム』（10）など。

COSTUME DESIGN
衣装デザイン

帽章
カミツレのマークの手前に本をデザイン。本の背表紙部分には「Force in the hardships」(苦難の中の力)と書かれている。

階級章
郁は一等図書士の記章をつけている(その他の階級章についてはKeywordsページ参照)。

記章
図書隊の記章。カミツレと本をデザイン。シャツにも刺しゅうされている。

記章
タスクフォースの記章。図書隊のグリーンをベースにカミツレのマークをデザイン。

図書隊ロゴ
図書隊のグリーンにカミツレと本のデザイン。

「図書隊の制服は、世界の警察や軍隊の制服を参考にデザインしてもらいました。タスクフォースメンバーの練成された体型も生かせるよう、シャツはタイトなシルエットにしています。女性のほうは、スカートにも見える、動きやすいひざ上丈のキュロットです。ワッペン類は美術部のデザインで作ったオリジナルでディテールまでこだわった作りです。平成の世に存在しない"図書隊"の制服を作ることは、図書隊そのものの精神や規律を表現することでもありました」(辻本P)

SIG SAUER P220
図書隊が標準装備する拳銃。
全長198mm、重量810g。

「図書隊の武器は、自衛隊のお下がりだという設定が原作にあります。そこで、武器は陸上自衛隊からのものと設定。戦闘服もそこからの流れで考えました。でも全体をオリーブドラブ一色に固めず、ボディアーマーは黒にして全体に引き締まった印象を出しています。ベストに付くポーチは図書隊がメインで使用する、9mm機関けん銃のマガジンサイズに合わせています。一方で、良化隊は、警察機構からの流れを汲んだ組織と設定し、全体のスタイルや装具など、警察を意識して、色も、濃い紺色をベースにしています」(佐藤監督)

9mm機関けん銃
タスクフォースが装備するサブマシンガン。略称はM9。全長399mm、重量2.8kg。発射速度は1分間に約1185発。日本製で、1999年から自衛隊が採用している。

89式小銃
タスクフォースが装備する自動小銃。全長は916mm、重量は弾倉を除いて3.5kg、発射速度は1分間に650～850発。

衣装 宮本まさ江

近年の参加作品:『源氏物語　千年の謎』(11)、『つやのよる　ある愛に関わった、女たちの物語』(12)、『脳男』(13)、『千年の愉楽』(13)、『舟を編む』(13)など。

ACTION
アクション

『図書館戦争』のアクションを構築する

今回、撮影前に前もってアクションシーンのビデオコンテを作ったのは、トイレの拘束シーン、柔道場のシーン、銃撃戦のシーン、敵のアジトでの肉弾戦のシーンです。それを画コンテに落として全スタッフに渡し、撮影していきました。佐藤監督とは何度もお仕事をさせていただいていますが、アクションに理解のある監督なので、アイディアのキャッチボールができるのが楽しいです。普段僕らがアクションシーンをプレゼンするときは取捨選択できるように長めに作り、話し合いの結果短くなることが多いんですが、佐藤監督はどんどん足していくから、膨らんでいって撮りきれないぐらいの量になるんです（笑）。

堂上のアクション

堂上は得意技を限定せず、郁が無鉄砲に行動するのに対し冷静な判断ができるということを意識しました。一番こだわったのは、アジトでの肉弾戦のシーンです。実は肉弾戦は原作にも台本にもなかったんですが、監督とも話して、岡田さんが堂上を演じるなら絶対に観客の方々も観たいだろうと。それに堂上が郁を助けに行ったとき、犯人との銃撃戦で終わるよりも、肉弾戦で終わる方が、観ている方も感情移入しやすいんじゃないかと思い、銃弾戦で弾がなくなった後、ナイフを持った相手と肉弾戦になるという流れを入れました。あそこのシーンは1日しか撮影時間がなくて、岡田さんはずっと動きっぱなし。かなり大変だったと思います。

技についてのディスカッション

岡田さんは格闘技と武術のインストラクターの資格も持っているので、立ち姿とかちょっとした構えが様になっている。体に動きも染みついているし、筋肉があるから、普段から強そうに見えるんです。それがまさに堂上という感じでしたね。普通、アクションの内容を役者さんに伝える場合、まず感情面や設定について話し合いますが、岡田さんとは具体的に技について語れるので格闘家と話している感じなんです（笑）。僕たちからアイディアを出す一方で、「こういう場合はどういう技を出しますか?」と岡田さんに聞くと、細かいアイディアを出してくださる。「さすが師範（笑）」と思いつつも、「この人とは絶対戦いたくないな」と思いました。プロですからね。僕も含め、うちのアクションチームはたぶんみんな負けると思います（笑）。

郁のアクション

郁は、運動神経が良くてもともと陸上経験者で、特技が柔道の大外刈りという設定です。榮倉さんにはかなり大外刈りの練習をしてもらいました。あとは郁の成長とアクションの変化が上手くリンクすればと考えました。入隊したばかりの頃の郁は、実戦を前提とした訓練をスポーツ感覚で見てしまう部分があり、初めて図書館で不審な人物を取り押さえたときも、最後まで拘束しなかったせいで堂上が怪我をしてしまう。その後、郁のアクションも徐々に変わってくるんですね。クライマックスで郁が拉致されて堂上が助けに入ったとき、堂上は郁に銃を渡し仁科を守れと指令を出します。そこからは、郁に変化が現れ強くなる。堂上に認められたことで、責任感を持って自発的に行動するような流れにしました。そして、堂上のピンチに郁は銃を持って助けに行き、それまで人を撃ったことがなかったのに、堂上の「撃て」の一言で引き金を引く。そこのドラマに持っていくためのアクションの流れを上手く作れればと思いました。

今回の仕事を振り返って

岡田さんに関しては圧倒的な安心感がありました。難しいアクションもスタントなしでこなされますし、可能性が無限にあるなと思いました。榮倉さんは本番に強いんです。郁は、普通の女性よりも強く、活発に見えなきゃいけないので、大変な部分も多かったと思いますが、こちらがこのぐらいまでできてほしいとイメージするものをいつも少しずつ超えてきてくれる。それはさすがだなと思いました。

アクション監督 **下村勇二**

近年の参加作品：『決闘の大地で』（10）、『GANTZ』（11）、『GANTZ PERFECT ANSWER』（11）、『プラチナデータ』（13）、ドラマ「ラッキーセブン」（12）など。

岡田准一 × 榮倉奈々 スペシャル対談

――お二人は初共演ですが、最初にお会いになったときの印象は?

岡田:衣装合わせで、榮倉さんとお会いしたときに、「郁がいる!」と思いました。それが、「この作品は大丈夫だ」っていう自信になりましたね。

榮倉:私は「岡田さんだ!」と思いました(笑)。

岡田:(笑)。

榮倉:岡田さんの出演されていたバラエティ番組が大好きでずっと見ていたんです。でも、撮影中にそのことを言ったら関係が変わってしまうと思っていたので、誰にも言わずにいて。意識的に「岡田さんは堂上教官だ」って思うような流れを作っていた気がします。

――堂上は鬼教官で、しごくシーンもありました。

岡田:しごいた感想は楽しかったです(笑)。

榮倉:(笑)。

岡田:訓練シーンの撮影のときは、相当疲労されているとわかっていながらも、好きなタイミングでスクワットを増やしたり(笑)。大丈夫かな?と思いながら、本当につらそうな榮倉さんを見るのが楽しかったです……って、ちょっと変な発言ですね(笑)。

榮倉:ギリギリですね(笑)。私は、本当につらかったのですが、しごかれると、「くそーっ」て(笑)。「できない」とは絶対に言いたくない自分がいて。負けず嫌いなことがバレていたのかなと思いました。

岡田:監督はどうでした?

榮倉:いつもニコニコされているんですが、厳しい感じもあって。訓練のシーンでしごくのは、岡田さんというか、堂上なんですけど、監督が「もう一回」と言ったら、もう一回やるわけで、途中で二人が悪魔に見えてきました(笑)。

岡田:(笑)。

榮倉:いつも笑顔の監督だけど、本当は悪魔だなと思いながら、「はーい」と返事をしていました(笑)。

岡田:監督が一番笑ってたよね。

榮倉:そうですよね。悔しい(笑)!

岡田:あと、佐藤監督と言えば、ITですよね。iPadとパソコンとiPad miniとiPhoneと、4つの機材を持って現場に来られる。すごいんですけど、それだったらどれか1台でいいんじゃないかって(笑)。

榮倉:あんなにITを駆使する監督は、初めて見ました。

岡田:現場でiPadを使って演出されてましたね。細部まですごくこだわられる方で。

榮倉:この映画は、そのぐらいこだわらないとできないんだろうなって。みんな寝てなくて、監督も同じぐらい寝てないのに、楽しそうでした。

岡田:そういえば、一回風邪をひかれてましたよね。「ゴホンゴホン」って言ってるから「監督、風邪ですか?」って聞くと、「風邪じゃないです」って。でも、あきらかに風邪なんですよね。マスクして、「うー!」って(笑)。

榮倉:咳がすごかったですよね。

岡田:「カット!」って言えなくて、「ゴホッ、ト!」って(笑)。「やっぱり風邪じゃないですか?」って言っても、「いやホコリが」って。

榮倉：病は気から（笑）。
岡田：それでも元気に動き回られて、楽しそうで。そういう姿が、みんなの信頼を生むんだろうなって思いました。

――撮影はかなりハードだったそうですね。

榮倉：私は、「結構大変だけど、がんばっている」と思っていたんですけど、完成した映画を観たら「え?岡田さん、こんなにアクションの撮影していたの?」って（笑）。びっくりしました。すごいですよね。
岡田：アジトでの肉弾戦は、1日で撮ったんですよ。よくあの短時間で撮れたなって（笑）。
榮倉：スタッフさんもタフな方ばかりで。
岡田：今回、画コンテが台本より分厚かったんです。現場でも、もちきりの話題でしたね、これ撮れるのか?っていう。でも撮れちゃいました（笑）。ちなみに、監督のこだわりで、堂上の銃だけ、撃ったときに弾が赤く発光するって知ってますか?
榮倉：え?知らないです。普通は何色なんですか?
岡田：黄色っぽい色。それを赤くするのが監督のこだわりで。でも、そのためには、オリジナルで作って調合しないといけないから、貴重な弾だったんです。
榮倉：細かいですね。
岡田：堂上の弾がない事件っていうのがあって（笑）。
榮倉：何ですか? 使いすぎたんですか?
岡田：使いすぎるとなくなっちゃうんです。大変でしたね。僕は一発の値段を知っているので、NGが出ると責任を感じて。そういうプレッシャーと戦いながらやってました。
榮倉：怖いですね。知らない方がやりやすいですね（笑）。
岡田：あと、堂上の銃は周りより微妙に連射が速いんですよね。その分、撃つのは難しくなるんですけど、そういう監督のこだわりが嬉しかったですね。

――胸キュンシーンについてはいかがですか?

岡田：これまで、芝居中に動揺したことはあまりなかったんですけど、今回堂上を演じて、榮倉さんには、いい意味で何回も動揺させられました。たとえば、アジトから出てきて再会するシーン。堂上が郁を褒めると、郁は、堂上に向かって泣きながら「堂上教官を目指します!」って言いますけど、台本に泣くとは書いてないし、まさか泣きながら言うとは思ってなくて。あのときの堂上のリアクションは、僕の素のリアクションだと思います（笑）。ドキッとさせていただいた瞬間でしたね。
榮倉：確かに顔が優しくなっていたように感じました。
岡田：撮る前は、もう少し微妙な表情になるかな思っていたんだけど。榮倉さんは、テストでやらないんですよね（笑）。
榮倉：すいません（笑）。
岡田：本番で違う芝居をされて、ドキッとさせられるんです。
榮倉：あのときは、後ろに朝日が昇るところを撮ることになっていたので、「一回しか本番ができない」というプレッシャーがすごくて。私的にはあそこはすごく大事なシーンなのに、「一回?」みたいな感じで（笑）。
岡田：現場も「早くいくぞ!」「日が昇るぞ!」みたいな空気があって。
榮倉：その重圧に負けそうで、「なんだこの男臭い現場は!」と思いながら（笑）、とにかくピークを本番だけに持っていかないといけなくて。すごく動揺してました。
岡田：僕は、今までと違う感覚でお芝居をやらせてもらえて嬉しかったです。

――岡田さんから見た郁の魅力と、榮倉さんから見た堂上の魅力をお聞かせください。

岡田：郁は原作を読んだときは真っすぐな人だなと思ったんだけど、榮倉さんが演じた郁がピュアというか、榮倉さんが演じたからこそ、ピュアな郁になったんだと思います。郁が現場で泣いたり、真っすぐに自分に思いを伝えてきたりすることが、堂上としては嬉しくもあり、複雑でもあり。一方で、自分が命を預けられるような人になってほしいという願いもあるし、いろんな思いがあって。そんな中で、自分をドキッとさせていただけたのは、榮倉さん演じる郁のピュアさでしたね。
榮倉：ありがとうございます。なんか恥ずかしいですね（笑）。私は、入隊試験の面接のときに、郁が、昔会った図書隊の人が堂上と知らないで、王子様に会ったとことを嬉しそうに話しているときの堂上の表情ですね。冷静を装っているのに、すごく恥ずかしそうなのがみんなにバレている不器用な堂上が素敵でした（笑）。
岡田：マニアックなところ、いただきました（笑）。
榮倉：普段、表情の変化を見せてはいけない立場の人の心が動くシーンは、すごく素敵だなと思って。それを思わぬところで見せる瞬間が、女の子の心を掴むんじゃないかなと。あとは、男の人同士でしゃべっている会話も好きです。郁だけが本隊から外されたとき、手塚が、堂上教官を追って「瞬発力だったら、自分よりあいつの方がある」ってかばってくれるじゃないですか。その後、小牧さんが堂上に、「今に見てろチビ!」っていう郁の言葉を伝えて、手塚が「見境ねえな」って言う。あのシーンの男だけの会話が好きです（笑）。マニアック過ぎるかな。
岡田：今日、改めて思ったのは、榮倉さんはマニアックだ、ってこと（笑）。

――今回の共演を振り返っていかがですか。

榮倉：岡田さんとの撮影の最後の日に、岡田さんは早めに終わっていたんですけど、先にホテルに帰らず、現場で私が終わるのを待っていてくれたんですね。それでいざ終わったら、「お疲れさまでした」って、さらっと帰っていかれたので。あれ?ずっと待っていたのに、みたいな。すごく不思議な方だと思いました（笑）。
岡田：最後の日だったので、終わるまでいたんですけど。終わった後は、メイクを落としたり、いろいろするだろうと思ったから、「お疲れさまでした」と言って、帰っちゃったんです（笑）。
榮倉：映画は、撮影中に岡田さんから「この映画ってどんなジャンルの映画なんだろうね」っていう話があって、「確かに」と思っていたんです。ラブコメでもあるしアクションでもあるし、どう言えばわかりやすいんだろうって思っていたんですけど。要素がいっぱいありますよね。
岡田：そのバランスが難しいだろうなと思っていたんですけど、監督やプロデューサー、脚本の野木さんはじめ、みんなが「図書館戦争」を愛していたから、完成した映画は、原作好きの方にもアニメファンの方にも納得していただける作品になったんじゃないかなと。いろんな要素が詰まった、バランスのいい作品になったので、喜んでもらえたらいいなと思います。

岡田准一 × 佐藤信介
スペシャル対談

――ご一緒されるのは、『COSMIC RESCUE』以来ですね。

佐藤：以前ご一緒したとき、話し合いながらキャラクターや人物の動きが作れた思い出があったんです。だから、今回もそうできるかなという期待はありました。ただ、岡田さんがどんな感じになられているのか、わからないので。

岡田：（笑）。

佐藤：「もし違っていたらどうしよう」という不安もありました。でも、今回ご一緒してみて、前よりもやりやすい感じがすごくして。『COSMIC RESCUE』は、異世界を舞台にした映画ということもあり、歳を重ねた岡田さんの姿がまったく想像できなかったんですけど、今は30代前半？

岡田：32です。

佐藤：40代、50代の岡田さんも見てみたいと思いますね。

岡田：監督とは、今思えば、申し訳ない時代にご一緒させていただいたんです。あまりにもストイックだった時代というか……映画をやりたい、芝居をやりたいという強い思いは今も変わらないし、失敗したら次がないと思ってやってますけど、若いからもっとギリギリというか、自分の身を削ってでも、命を懸けて芝居に打ち込むんだという思いが前に出てしまっていた頃で。すごく迷惑をかけたと思います。

佐藤：そんなことはなかったですよ。真面目な印象は確かにありましたけど。真剣そのものというか。

岡田：ボクサーみたいに飢えているほうが、芝居の感覚が鋭くなっていい、みたいなことを本気で思っていたんです（笑）。今思えば、恥ずかしいですし、申し訳なかったなと。でも、今回10年ぶりにご一緒できたのはすごく嬉しくて。当時、監督が32歳だったんですよね。あの頃の監督の年齢に自分がなったときにお会いできるわけで、10年前とは違う、成長した姿とか、経験を経た感じが見せられたらいいなという思いはすごくありました。

佐藤：経験や成長は感じましたね。10年前ならまったくイメージできなかったですけど、今の岡田さんからは堂上的な部分を感じますし。堂上のまなざしとか、堂上の物言いとかがぴったり合っていて、説得力があったと思います。

――アクションシーンは岡田さんが堂上を演じるにあたり増えたんですか？

佐藤：そういう面はありますね。まず、この作品をどういう映画にして、どう楽しんでもらおうかと考えたときに、『図書館戦争』というタイトルだから、もちろんある種の戦争映画にしたいという思いはありました。でも、クライマックスは、戦争があって終わりではなくて、その先に、ある個人的な救出劇が展開されて、そこがカタルシスになればいいな、と思っていたんです。それは、堂上を岡田さんが演じるということで、プラスになった部分がすごくありました。僕自身、一映画ファンとして、「この世界の中で岡田さんが堂上役をやるとしたら、こんな映画になってほしい」という思いがあって。監督するならば、それを映像化したいなと。そういう意味で、アジトの肉弾戦は、徐々に変貌を遂げていったシーンですね。

岡田：肉弾戦は自分でもできると思っているんですけど、『SP』のときに

アクションを撮影していた経験から言うと、撮れるスケジュールではないな、と。

佐藤：(笑)。

岡田：でも、自分がアクションができるという前提で、信頼して増やしてもらえたことは光栄でしたね。ただ、画コンテの量が半端なくて。

佐藤：吐きそうでした(笑)。

岡田：画コンテが台本より分厚いんだけどって(笑)。でも、時間がなかろうと、とりあえずできるだろうという前提において……(笑)。

佐藤：頼りまくって(笑)。

岡田：物事を進めてもらえるというのは、冥利に尽きるというか、嬉しかったですね。

佐藤：今回は、岡田さん自身が動けるので、アクションシーンの撮り方が独特だったんです。本来、顔が映らないのであれば、吹き替えでやるという選択肢もあるんですけど、岡田さんの方が上手いからやってもらう場合があるんですよね。あとは動きの追求が、普通は僕とアクション監督の下村さんが見て、OKかもう一回か判断するんですけど、その上に、岡田さんの方から、「ここはこうできるからもう一回撮りたい」というのが加わってくるんです。だから、何度もやったカットがありますし、そういう意味でも普通ではない、特殊な現場でしたね。

——例えばアジトの浴びせ蹴りなど?

佐藤：そうですね、あれも「もう一回やらせてほしい」と岡田さんが言ってくれて撮ったカットです。普通あの蹴りはできないですよ。特に、みんなが疲労の極みに達しているときの撮影でしたし。

岡田：朝の5時、6時ぐらい。

佐藤：オレもつらいと思いながら(笑)。「まだできるのか?」と思ってやってもらったんですが、今見ても本当に上手くキマっていますよね。

岡田：最後は本当に蹴りをいれてます(笑)。それまでは役者さん相手に蹴っていたので、蹴りづらかったんですよ。それで「最後に吹き替えの方でお願いします」と。まあ、蹴っていい人はいないんですけど(笑)、蹴りを当てても大丈夫な人で一回やらせてもらったんです。それでOKをいただきました。

佐藤：倒れ方もリアルでしたから。

岡田：本当に蹴ってますから(笑)。

——堂上の王子様的なキャラクターについては?

佐藤：原作やアニメの堂上のイメージを一回忘れて、ゼロに立ち返って考えたときに、実写の堂上をどうするかは、シナリオ段階からの一つのテーマでした。そして思ったのは、無表情で滅多に笑わないんだけど、実は裏に秘めたものがあって、それがちょっとした瞬間に見えるのが堂上のキュートさだろうと。でも、こういうハードな戦争を描く映画に、果たしてそんなキュートなタッチが同居するのか、わからないと言われる人もいて。それが一気にみんなに伝わったのが、最初の頃に撮った図書館のシーン。あくびをする郁を、堂上がバインダーで叩く場面を撮ったんです。それは、岡田さんと「叩いたらどうか?」と話したところから始まって。実際やってみたときに、「これだ!」みたいな感じがあって、一発でイメージがみんなに伝わった瞬間だったんですよね。岡田さんとは今回も、細部にわたっていろいろアイディアを出し合いながらやれましたね。

岡田：叩くとは台本にはなかったんですよね。「勤務中だぞ」と口で言うだけというのもありだとは思いますけど、トイレのシーンで本気でひっぱたく前のコミュニケーションとして何かほしいなと思って、監督と相談して、「叩くのはありですね、じゃあ、何で叩きますか?」みたいな(笑)。

佐藤：(笑)。

岡田：「素手じゃないですよね。バインダーはどうですか?」「バインダーありますか?」っていうようなやりとりをして。なぜ堂上がバインダーを持っているのかはわからないですけど(笑)。その場で生まれてくるノリみたいなもので決まって。持ち道具さんは大変ですよね。「用意してないよ」みたいな。

佐藤：自主映画ノリじゃないですけど、僕としては、「とりあえず持てばいい」と(笑)。

岡田：それに瞬時に対応してくれるスタッフさんがいて。

佐藤：面白かったですね。

——クライマックスのパトカーが止まっているシーンは?

岡田：僕が榮倉さんにドキッとさせられたシーンですね。

佐藤：すごく好きなシーンになりましたけど、よくあんなに時間のない中で撮れたなと(笑)。

岡田：僕らよりも、空を見て芝居をする感じで。明るくなってくるから、テストもそこそこに、「本番いきまーす!」って(笑)。榮倉さんが泣くとは思わず、本当にキュンキュンしながら、あのシーンは演じていました。また監督が嬉しそうな顔をされていて。

佐藤：僕はカメラ脇で泣いてましたから。素晴らしかったです。

岡田：良かったなと思いました。

佐藤：最後は夜が明けて、使えなかったカットもあるんです。それぐらいギリギリだったにも関わらず、すごく素敵なシーンになって良かったです。現場は劣悪でしたけど(笑)。

岡田：(笑)。楽しかったですけどね。

——堂上のラストカットについては?

佐藤：未見の方にとってはネタバレですが……。3パターンやってもらって、その中から選びました。

岡田：めちゃくちゃ爽やかな堂上バージョンや、笑顔マックスバージョンもあったんです。たぶん使われないだろうな、と思いながらやってましたけど(笑)。

佐藤：最後の最後のカットですから、相当こだわって撮りましたけど、選んだのは、ほのかに微笑んでいるバージョンですね。こだわりの、渾身のかすかさです(笑)。結果、素敵なカットでこの映画を締めくくることができたので、ぜひ注目して見てもらいたいですね。

——今回の再会を振り返っていかがですか。

佐藤：「図書館戦争」という小説は、面白い上に、本当に独創的な作品です。こんなすごい原作を映像化するハードルは、とても高かったと思います。でも僕は、見たことのないものを作りたいといつも思っているし、その方向性が同じ役者さんとやりたいという思いもあって。今回、岡田さんと、こうして大きな山に向かって協力し合えたことはとても嬉しかったし、心強かったし、感慨深い。しかも、岡田さんが向かわれているところというのは、僕の向かいたい方向と似ていると勝手に感じているので、また機会があればぜひご一緒したいなと思います。

岡田：自分が役者をやっていて思うのは、一緒にやって楽しいとか、その作品の力になる存在になりたいということなんです。ずっと監督のことを見てきて、今回また一緒にやらせてもらえて、改めて信頼させていただける監督だと思いましたし、みんなが驚いたり、熱を感じてもらえるような、映画ならではのエンターテインメントを作るにあたり、「一緒にやろうよ」と言っていただけるなら光栄ですよね。「監督となら何でもやりますよ」と言えますし、いつかまたご一緒できたらいいなと思います。

KEYWORDS
用語集

メディア良化法
人権を侵害する表現や公序良俗を乱す表現を規制する法律。実質上のメディア検閲の合法化といえる。武力行使さえ厭わず、強権的かつ超法規的にメディア良化法を運用するのが、法務省に本拠を置くメディア良化委員会である。

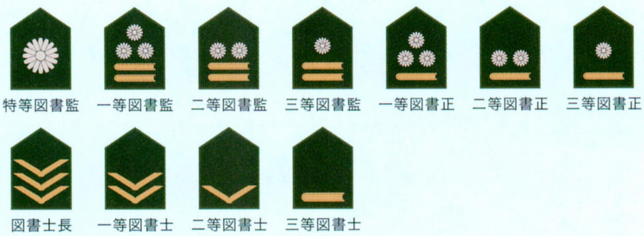
良化特務機関（メディア良化隊）
メディア良化法の代執行組織である。メディア良化法第三条に基づく検閲行為を主に行い、時に銃器を用いた武力行使も伴う。

図書館法
メディア良化法成立とほぼ同時期に成立。通称「図書館の自由法」。日本図書館協会で採択されていた「図書館の自由に関する宣言」をもとに立法化された。メディア良化法に対抗するため、三章からなる既存の図書館法を基礎に、第四章として「図書館の自由に関する宣言」を立法化。これにより、図書館だけが唯一、検閲に対抗できる法的根拠を持つ組織となった。

図書隊
本を読む自由を守るために生まれた自衛組織。戦い方は専守防衛を基本姿勢としている。武装化しているが、威嚇射撃が中心であり、殺傷目的での発砲はしない。図書隊の銃器使用権の使用は図書館敷地内のみに限られる。業務部、防衛部、後方支援部などの部署がある。

図書特殊部隊（ライブラリータスクフォース）
図書隊防衛員の中から選抜された者で編成される精鋭部隊。通常の図書館業務から、良化隊等との最前線での攻防戦まで幅広い任務をこなす。郁が初の女性隊員となった。

図書隊の階級
11に分かれている。堂上、小牧は二等図書正であり、郁、柴崎、手塚は一等図書士である。図書士の階級章のモチーフは本、図書正から一等図書監の階級章には本に加えてカミツレも描かれている（特等図書監はカミツレのみ）。



カミツレ
カモミールの和名。花言葉は「苦難の中の力」。図書隊のシンボルであり、図書隊員の階級章のモチーフにもなっている。

日野の悪夢
メディア良化法に賛同する団体が突如、日野図書館を襲撃。稲嶺館長以下、図書館員12名が殺された事件のこと。62万5098冊の書物が焼き払われ、残ったのは、地元の歴史をつづった希少本の1冊だけだった。この事件を機に、図書館は図書隊を設立、武装化を進め、現在に至る。

見計らい権限
書店の図書を、図書館法第三十条に定められた資料収集の権利に基づいて、“見計らい図書”とする権限のこと。見計らった本は検閲を免れるが、図書館で購入・収集しなければならない。つまり、図書の買い上げ制度。行使できるのは図書正以上と定められている。

「はじまりの国のさいごの話」
小学生のシンイチが、7人の小さな神様たちが住む「はじまりの国」で仲間とともに冒険をする全21巻シリーズの最終巻。主人公が、剣で竜の首を落とすのが残酷だとされ、検閲対象図書となってしまった。しかし、実は一番問題だったのは、主人公たちが落ちこぼれだが個性的だったこと。それが、意見単一化をすることで諸外国に対し一枚岩で取り組んでいこうとする国政に反していたのが検閲理由であった。

表紙画デザイン：斎藤岩男

世相社
折口マキが働く出版社。週刊誌「週刊新世相」を発行している。メディア良化法に批判的な立場を取っているため、メディア良化委員会からは常にマークされている。

HISTORY
年表

西暦	日本	出来事	備考
1988年	昭和63年	メディア良化法、成立。 図書館法、成立。	
1989年	正化元年	メディア良化法、施行。 図書館法、施行。 ＊昭和天皇崩御、年号が正化に	
1990年	正化2年		
1991年	正化3年	＊湾岸戦争、 バブル崩壊	
1992年	正化4年		堂上、小牧が生まれる
1993年	正化5年		
1994年	正化6年		
1995年	正化7年	＊阪神・淡路大震災、 地下鉄サリン事件	
1996年	正化8年		
1997年	正化9年		郁、柴崎、手塚が生まれる
1998年	正化10年	日野図書館が規模を拡大し、 新館に移転	
1999年	正化11年	2月7日～日野の悪夢	
2000年	正化12年		
2001年	正化13年	＊9.11	
2002年	正化14年	＊日韓W杯	
2003年	正化15年		郁、柴崎、手塚が小学生に
2004年	正化16年	図書隊発足　＊スマトラ沖地震 図書大学校開校	
2005年	正化17年		
2006年	正化18年		
2007年	正化19年		
2008年	正化20年		
2009年	正化21年	＊民主党政権交代	郁、柴崎、手塚が中学生に
2010年	正化22年		堂上、小牧が 図書大学校に入学
2011年	正化23年	＊東日本大震災	
2012年	正化24年		郁、柴崎、手塚が高校生に
2013年	正化25年		
2014年	正化26年	図書大学校廃校 10月4日～研修中の堂上が 見計らい図書騒動	堂上、小牧入隊
2015年	正化27年		郁、柴崎、手塚が大学生に
2016年	正化28年		
2017年	正化29年		
2018年	正化30年		
2019年	正化31年	4月、郁、柴崎、手塚、関東図書隊に入隊 6月25日～郁、手塚が 図書特殊部隊に配属 10月22日～野辺山宗八死去 10月26日～情報歴史図書館閉館 仁科基地司令誘拐	郁、柴崎、手塚入隊

良化法施行後、早い段階から良化隊は銃器による武装化が行われ、検閲に対抗する為に図書館は警備隊を組織、銃器による武装化が進む

仁科が中心となり図書隊設立に尽力

＊印は正史で起こった出来事。

岡田准一

榮倉奈々

田中　圭　　福士蒼汰

西田尚美　　橋本じゅん

栗山千明
（特別出演）

石坂浩二

鈴木一真

相島一之

嶋田久作

児玉　清

テイ龍進

波岡一喜

落合モトキ

井坂俊哉

工藤俊作

阿部丈二

草薙良一

増田修一朗　俊藤光利
大迫一平　植木祥平
松崎　裕　朝香賢徹
荒木貴裕　生島勇輝
宇都宮一基　大塚幸汰
佐藤充浩　小林　峻
酒井勇樹　中村織央
二階堂修　福田　望
和田亮太　井出卓也
大塚ヒロタ　前野朋哉
岸本尚子　吉岡奈都美
五十嵐麻朝　伊藤悌智
上野直人　西　泰平
廣瀬裕一郎　髙橋宗人
三宅克治　千野裕子
山森大輔　春日井静奈
寺田伽藍　西田奈津美
桝木亜子　満田伸明

西守正樹　成松　修
加藤貴宏　河野マサユキ
瀧口亮二　亜佑多
夛留見啓助　新田匡章
湯浅景介　渋谷謙人
林田直樹　内ヶ崎ツトム
根本太樹　石戸健太郎
黒石高大　沖原一生
北代高士　熊川雄大
斉藤　悠　塩見大貴
山口航太　三元雅芸

佐藤　誓　樋渡真司
国枝量平　岩手太郎
清水一彰　大久保運
平野靖幸　渡邊　聡
宴堂裕子　剣持直明
須田琉雅　吉澤実里
平澤宏々路　碓井由美
石田由紀子　岸田タツヤ
大城真和　田林通隆
宮坂幸子　増田俊樹
大塚和彦　青木一平
中野マサアキ　田野良樹
小西智志　小路さとし
池田宜大　福満景子
内藤トモヤ　黄田明子
福井絵美　石川ともみ
溝口園枝

分林里佳
浦口直樹（TBSアナウンサー）
伊藤隆太（TBSアナウンサー）
赤荻　歩（TBSアナウンサー）
氏田朋子（CBCアナウンサー）
永岡　歩（CBCアナウンサー）
福島暢啓（MBSアナウンサー）

服部整治　小森郁子　松木研也
川名陽介　八戸　優　田代純一朗
荒金裕介　飯島　肇　後藤啓太
塩原啓太　中野慎太郎　酒元信行
青木友哉　大山鎬則　春原美和
大淵和洋　岡澤由樹　川上晃二
酒井凜太郎　笹井雄吾　高平晃二郎
半田裕典　堀井真人　新井良平
小杉史哉　大久保了　小野克好
時任亜弓　五十嵐昇　金子昌弘
今田真治　三ツ村昌広　成瀬昌由
片桐俊次　松重　慎　広兼敬一
島田晋吾　小椋亮平　長谷川恒
石川健一　坂本真也　榎本崇
小沢昇路　堀田達也　安長博文
室井勇人　エイジ・レオン・リー　中山史尚
東　伸治　剣崎　亮　金井雅史
新井俊哉　栗山元博　松田　翔
松澤　聡　横田竜介　阿部俊介
五十嵐昭人　横山奈美　畠中みゆき
佐々木絵美　古山真衣　水木　琴
田尻沙夜香　草野日登美　武藤佑香
奥山美子　藤崎弓佳　堤　沙織

ウェスタ　麗・タレントプロモーション　劇団いろは
ネオモデルタレントスクール　芸優　劇団ひまわり
芸プロ　ストームライダー　サムライプロモーション
テアトルアカデミー　TMコーポレーション　MST
パインズ　サンミュージック福岡　オフィスくじら
アクティブ博多　パブリックチャンネル
ボランティアエキストラのみなさま

エグゼクティブプロデューサー　濱名一哉
スーパーバイジングプロデューサー　那須田淳
プロデューサー　辻本珠子
原作　有川　浩「図書館戦争」（角川文庫65周年記念）
脚本　野木亜紀子
音楽　髙見　優

共同プロデューサー　厨子健介
吉田浩二
音楽プロデューサー　志田博英
ラインプロデューサー　田口生己
アソシエイトプロデューサー　渡辺信也

撮影監督　河津太郎
美術　斎藤岩男
録音　横野一氏工
Sound Design Supervisor　Steven Ticknor
装飾　松田光畝
スクリプター　田口良子
編集　今井　剛
VFXスーパーバイザー　神谷　誠
ガファー　中野創平
アクション監督　下村勇二
操演　関山和昭
ガンエフェクト　納富貴久男
衣装　宮本まさ江
ヘア・メイク　本田真理子
キャスティング　北田由利子
制作管理　中林千賀子
制作担当　高瀬大樹
助監督　李　相國

監督助手　松田康洋　上條大輔　奥村陽介
Bキャメラオペレーター／撮影助手　田中　悟
撮影助手　島　秀樹　森内李衣
特機　小塚和也
特機助手　今井正雄
照明助手　上條圭介　村田暁彦　八十川和博
中野洋幸　松本幸文　石塚真也
河本隆一　黒木美紗
録音助手　矢澤　仁　小野浩志　小林亜由美

美術助手　長島由明　竹渕絢子　橋本　連
美術制作　前田正晴
大道具　森　竜太　川口　茂　塩崎正弘
伊藤訓章
塗装　島野今日子　馬渕貴央　信貴千春
組付き大道具　大塚竜一
装飾助手　宮川幸子　前屋敷恵介　新谷友和
平野紘司
持道具　野上淳子
持道具助手　三國麻沙子
衣装助手　長渡美穂
ヘア・メイク助手　河本花葉
ウィッグ　前田節子

編集助手　金田昌吉　脇本一美
アクションコーディネーター　園村健介
スタント　柴田洋介　日野由佳
アクションスタッフ　谷本　峰　福嶌　徹　吉田浩之
市山英貴　遊木康剛　矢島一憲
稲留正樹　木村大輔　板垣　克
坂井香里　楠本奈美　金城寿美枝
操演助手　寺門　勇　巻木良孝　黒田政紀
ガンエフェクト助手　田渕寿雄　高原浩一　近藤　力
軍事所作指導　越　康広　長谷部浩幸
空撮　酒井隆史
カースタント　雨宮正信
脚本協力　西田大輔
画コンテ　丹治　匠
医療指導　山本昌督
トレーナー　櫻井　真
車輌　細川利昭　正木健三郎　仲野俊隆
磯部康裕　加文字義明　高橋　磨
武富孝浩　関戸　淳
照明機材　寺田　直　阿部晃彦
電源車　佐々木祐介　本田幸介

制作主任　加藤　誠　桜井恵夢
制作進行　武田　祥　今井康正
制作車輌　藤野尚美　教野陽子　斎木和正
鈴木健太　阪根克哉(インターン)
演技事務　福中真弓
エキストラ担当　村山和之
制作見習い　宮田康佑
記録見習い　杉本かおり(インターン)
制作経理　風間あづき
制作法務　辻　哲哉
制作デスク　関　はる美
プロデューサーアシスタント　大脇拓郎
監督エージェント　オリガミクスパートナーズ

ピクチャーエレメント

テクニカルプロデューサー　大屋哲男

VFXプロデューサー　道木伸隆
DIプロデューサー/カラーグレーダー　齋藤精二
フィニッシングエディター　大竹　航
劇中映像コンテンツスーパーバイザー/DIT　渡辺卓人
DIT　高橋直太郎
データアセットマネジメント　関塚佳央里
撮影機材コーディネート　原田俊弥
制作デスク　加用梨恵
劇中映像コンテンツ制作　目崎利幸　原　広樹
タイトル　大槻彩乃

イマージュ/モーターライズ

VFXスーパーバイザー　ツジノミナミ
3DCG&コンポジット　白尾清学　豊岡由之　桑原大輔
山本健介　間　瑤子　荒井栞花
庄子雅人　田口清隆
マネージメント　富澤睦夫

マリンポスト

コンポジット　伊藤あかり　今枝　渉　高橋　舞
アシスタントマネージャー　遠藤美香
コーディネート　田中貴志

Supervising Sound Editor　谷口広紀
Co-Supervising Sound Editor　Takako Ishikawa
Sound Effect Editor　Daniel Pagan　Bruce Tanis　Mark Lanza
本郷俊介　松井謙典
Foley Mixer　Randy K. Singer
Foley Artist　Sarah Monat-Jacobs　Robyn Harlan
Foley Editor　Jonathan Lipman　Jonathan Wakeham
Pre Dub Mixer　Todd Beckett　染谷和孝
Mix Recordist　Iden Kamishin
Sound Production Coordinator　Koyo Sonae

Post Sound Services Provided By Sony Pictures Studios, Culver City, California

ダイアログエディター　篠崎純平
スタジオエンジニア　石井秀明
スタジオアシスタント　藤島敬弘
テクニカルサポート　菊地秀穂
光学リレコ　多良政司

タイミング　飯野　浩
カラーマネジメント　由良俊樹
フィルムレコーディング　小越　将
ラボコーディネート　小山内円

Cキャメラオペレーター　甲斐公康
撮影応援　藤田明生　石井綾乃
特機応援　赤澤大介　後藤泰親　渡邉　孝
大塚伸一　野川勝二　山内智史
佐藤　光　大澤元洋
照明応援　今井文寛　川崎新平　加賀美武司
清水健一　赤尾正子　中松俊樹
丸山義次　佐伯琢磨
美術応援　比嘉陽子
装飾応援　大坂和美　遠藤善人　渡辺文乃
持道具応援　加々本麻未
衣装応援　竹内洋平　網中洋子　塚田亜矢子
立花文乃
操演応援　岸浦敏雄　村木一州　中條勝美
西岡慶一
制作応援　高見明夫　狭間聡司　下村和也
吉崎秀一　岩崎晋一　小野田唯
エキストラ担当応援　中村さやか　鶴田幸伸

エンディング・テーマ曲
「Library Wars」
作曲・編曲　高見　優

映画「図書館戦争」オリジナル・サウンドトラック(Anchor Records)

音楽コーディネート　溝口大悟

音楽プロデュース補　千田耕平
音楽ディレクター　岩崎充穂
音楽コーディネート補　久世　烈
音楽エンジニア　宮澤伸之介(Los Angeles)
オーケストレーション　信澤宣明
アシスタントエンジニア　秦　正憲　米山雄大　Jeff Gartenbaum
Jorge Velasco
レコーディングスタジオ　SoundCity
ミキシングスタジオ　The Village (Los Angeles)　Sony Music Studios Tokyo
音楽制作　ミラクル・バス
音楽協力　日音

宣伝プロデューサー　菊地裕介

パブリシティ　小倉良介　小宮良介
幕内一男　蟹井あや
タイアップ　山口泰弘
予告篇　里　謙二郎
予告篇プロデュース　蔦川亜希
ポスターデザイン　前田　亮　柳原康之　藤井　拓
奇掛　敦　桐原泰造
公式サイト制作　芦辺信司　藤本幸広
スチール　廣田美緒
メイキング　小森博和　渡辺かおり　長谷川浩平
製作宣伝　廣宮彩未

商品化　中山智絵
プロダクションアシスタント　諸井雄一
法　務　石曽根みどり　中村公彦
製作経理　井上　聡　島岡隆宏
海外セールス　大下善己　的井友香　三浦絵里子
書籍担当　吉良浩一　藤田孝弘

美術・装飾協力

キハラ株式会社　株式会社トーカイクリーン　株式会社オガワテクノ
東洋帆布製作所　ダニチペイ　日本光電
大研医器株式会社　株式会社バックスラボ
nangoku100katen.com　下呂山町立図書館
神奈川工科大学　医療法人清友会　笠松病院　キンワ株式会社
S&Graf　WENGER　VICTORINOX SWISS ARMY　STEINER
株式会社幸和義肢研究所
ROCKPORT　株式会社リスクコントロール
MILITARY SURPLUS SELECT SHOP WIP　SUREFIRE　SHICHIYO　東京マルイ
メガネドラッグ　キヤノンマーケティングジャパン株式会社
ヤマハ発動機株式会社　ピクセン
HIDEO WAKAMATSU　Anti-Forme Design　IKETEI
masami yanagida

衣装協力

メイク協力

取材・資料協力
国立国会図書館　さいたま市立中央図書館
高木亮介　アフロ　中岡泰博

撮影協力
防衛省　大臣官房広報課
陸上自衛隊　陸上幕僚監部広報室
西部方面ヘリコプター隊(西部方面航空隊)
第40普通科連隊(第4師団)
航空自衛隊　航空幕僚監部広報室『空飛ぶ広報室』
熊谷基地　入間基地
木更津基地　習志野分屯基地

北九州市　北九州市教育委員会　北九州フィルム・コミッション
日々谷健司　西山哲史　坂上秀之　庄司元一　磯本　淳
北九州市立中央図書館　北九州市立美術館　スペースワールド
財務省福岡財務支局小倉出張所　ブックセンタークエスト　Kraft
第一警備　小倉ベイホテル第一　ブルーウェイブイン小倉
東横 INN 小倉駅新幹線口　西鉄イン小倉　フォード北九州
いばらきフィルムコミッション　水戸市立西部図書館　茨城県民の森
新潟県十日町市　十日町情報館　新潟県十日町市ロケ応援団
富士の国やまなしフィルムコミッション　山梨県立図書館
山梨県民信用組合　常総フィルムコミッション　常総市立図書館
フィルムサポート島田　島田図書館　梅津会館　マルテナポリ
小山町フィルムコミッション支援室　富士総業　酒井書店
文教堂書店　東京木材問屋協同組合　日典ラサ中山　京王電鉄
成美堂印刷所　東京西徳洲会病院　國學院大學　東日紙商
目黒交通　商港エンジニアリング　三省堂書店

Library Wars Special Supporters

北島衣莉　甲斐有希子　黒木祥貴　米沢瑳希子　西村檪華　林　沙織
吉田悠里子　宇津川尋子　三原早紀子　島田美穂　福本　薫　冨高江美
奥山朋美　神原嵩章　久木田結　中尾ちひろ　西田十貴子　小野由絵
中村瑞紀　吉永和華子　神頃健人　堂本竜司　池尻美紗　船木真生
藤本梨花　佐藤春菜　片山功大　藤井雄基　滝川昌平　杉本佳奈栄
中村沙織　下迫友夏　谷川晶乃　村崎月咲　小柳京一郎　冨永諒平
安田祐樹　萩原嵩弘　藤沢香奈　笹渕嵩雄　佐藤詩織　右田　彩
塩月美鈴　久保上直哉　衛藤詩織　甲斐依歩　山元里恵　橋菜奈美
坂田祥子　西村陽介　北九州市のみなさま

協力
東宝スタジオ　東宝スタジオサービス
東宝ポストプロダクションセンター　東宝映像美術
吉田美術　光製作所　Angle Pictures　三和映材社
ハイキング　NKL　日本シネサービス　クリエイティブピース
アパッチ　日活調布撮影所　ポパイアート　高津映画装飾
ワード・ローブ　ベレッツァ スタジオ　ローカスト
BIG SHOT　ユーデンフレームワークス　Studio AD
ビッグファイタープロジェクト　メジャートレーナーズ
カースタントTA・KA　スーパードライバーズ
鈴木商店　LAカンパニー　トヨタレンタカー
マツダレンタカー府中駅前店　JTB　ファンテック
三考　Field-R 法律事務所　三交社　アクト
東通　アックス　タムコ　UTB映像アカデミー
エス・ジー・シー佐賀航空　NMT　ルナパルク
ピクチャーエレメント　イマージュ　モーターライズ
早稲田大学 安藤紘平研究室　早稲田/東宝 芸術科学センター
エム・ソフト　ヴェントゥオノ　カレント　イマジカ
社団法人日本図書館協会

制作協力
ブースタープロジェクト

FILMED IN PANAVISION WITH PANAVISION CAMERAS & LENSES
Kodak Motion Picture Film
DOLBY DIGITAL 一部上映館を除く
ドルビーフィルム・コンサルタント　河東努　森幹生

制作プロダクション
セディックインターナショナル

"Library Wars" Movie Project
岩原貞雄
安田　猛
市川　南
藤島ジュリーK.
中沢敏明
加藤直次
宮田一幸
和崎信哉
広田勝己
小玉　満

TBSテレビ　田代秀樹
角川書店　嵐　智史　内藤裕之　野口真梨子
東　宝　上田太地　小野田光　遠藤　学
ジェイ・ストーム　長松谷太郎　高橋淳之介
セディックインターナショナル　鹿島美穂　尾方邦彦　眞鍋浩介
CBC　川崎　朗　岡崎剛之　横地晶子
松本松己　安部正実
MBS　谷　紳一郎　福井亜砂子　柴田三穂子
古川範子
WOWOW　小西真人　石垣裕之　青木竹彦
武田吉孝　山野　晃
毎日新聞社　徳増信哉　立川明子　北林靖彦
宮脇祐介　吉川浩史
HBC　平田直樹　橋本能成　山根　恒
濱野祐司

監督
佐藤信介

©2013 "Library Wars" Movie Project

映倫 EIRIN 119509

上映時間：2時間8分／シネマスコープ／ドルビーデジタル
発行日：2013年4月27日　発行者：新坂純一　発行所：東宝(株)出版・商品事業室 東京都千代田区有楽町1-2-2　編集：(株)東宝ステラ 東京都千代田区有楽町1-5-2
デザイン：(株)アンクル　編集協力＋取材・文：森祐美子　印刷所：成旺印刷(株) 東京都千代田区内神田2-14-6 神田アネックスビル2F
定価：700円(税込)　http://www.toho.co.jp
本プログラムの一部または全部の無断複写・複製・転訳載等(WEBサイトでの使用を含む)を禁じます

GOODS 劇場商品通信販売

クリアファイルセット ¥500
PP製 A4サイズ 2枚セット

クリアポケット ¥400
PP製 約24×33.5cm

ステッカー ¥300
紙製
直径10.5cm

シャープ&ボールペン ¥650
ABS製
メタルプレート付き
全長約14.3cm

メモスタンド ¥850
ABS製 マグネット入り
約幅3.8×高さ5.6×
厚み1.3cm

ラバーコースター ¥600
ラバー製

ブックマーカー ¥800
メタル製
マグネット入り
しおり紐付き
全長約50cm

ブック型ふせん ¥500
ふせん5種付き
約6.5×8.5cm(閉じた時)

スライドミラー ¥700
ABS製
ボールチェーン付き
直径約6.5cm

カラビナリール キーホルダー ¥900
カラビナ:アルミ製
リール・チャーム:
メタル製
全長約14cm

ネックストラップ ¥850
ポリエステル製
カード・
メタルチャーム付き
ネック紐:
全長約90cm

リフレクター キーホルダー ¥500
PVC製
60×60mm

商品のご注文はインターネット通販またはお電話にてお受けいたします。
代金は商品代金+配送手数料500円となります。

※3,000円以上のお買い上げで配送手数料は無料になります。また代金引換の場合は代引手数料が別途かかりますのであらかじめご了承ください。
※品切れの際はご容赦くださいますようお願い申し上げます。

PC・携帯共通URL:http://www.stellatuhan.com/
電話窓口:ステラ通販 03-3503-6006 営業時間:月～金(5/1・祝・祭日を除く)11:00～17:00

図書館の自由に関する宣言

第１　図書館は資料収集の自由を有する。
第２　図書館は資料提供の自由を有する。
第３　図書館は利用者の秘密を守る。
第４　図書館はすべての不当な検閲に反対する。

図書館の自由が侵されるとき、我々は団結して、あくまで自由を守る。

東宝

T4988104058072